
俺はとある転生者

K S K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺はとある転生者

【Nコード】

N6270X

【作者名】

K S K

【あらすじ】

「どうも、主人公の芦原晋也です。なんか『この小説の紹介をしる』とか言われて来たんですが、そんなことは俺に訊かずに作者に訊けと、俺は知らねえよと。つーわけで、話すことが何もないので、元素を一から順番に言っていきたいと思います。水素、ヘリウム、リチウム、ベリリウム、ホウ素、炭素、窒素、酸素、フッ素、ネオン……えっと、次は……すいへーりーべーばくのふね……えっと……あつ、ナトリ——」

こんな適当な主人公ですが、宜しくお願いします。

}
K
S
K
}

ブローグ 神様は意外にRPG大好きな普通のサラリーマンかも知れない（前

ごめんなさい。勝手に始めました。

ブログ 神様は意外にRPG大好きな普通のサラリーマンかも知れない

俺は、死んだ。

いきなり言われても意味がわからないだろうが、俺の言うことに嘘偽りはない。俺は死んだんだ。

死因はわからない。俺が知らない間に死んでいたのだ。何の痛みもなく、何の苦しみもなく、命だけが体から切り取られた。

ただ、『死んだ』というその事実だけが、無理矢理にも頭の中に流れ込んでくる。俺の、認めたくない事実が。

何故そう言い切れるかって？ そりゃあ……

「すいませんでしたー！」
「……………」

奇抜な服装の見知らぬおっさんが俺の目の前で土下座をしているからだ。

ここで今の状況を説明しよう。

まず、俺の状態。まあ、普通だ。最近悩んでいた筋肉痛が気にならないくらい普通だ。少し体が軽く感じる。

次に、俺のいる場所。上も下も、右も左も、見渡す限り薄い黄緑が広がっている。何故薄い黄緑？ 白か黒かでいいじゃないか。で、奇抜なおっさんの土下座。そりゃあもう、地面にめり込むほどの素晴らしい土下座だ。

これで大体の人は予想できただろう。他の二次小説を読んでいる人ならば、この状況は呆れるほど理解できるだろう。『またこの入りカヨ、飽きちゃったヨ』なんて思っている人もいるだろう。

そう。これは転生前の世界。いわば神のいる世界だ。

そして、恐らく俺は転生させられることになる。

まあ、言ってみればテンプレだ。ここからの会話の流れはおおよそ予想がつく。

おっさんは実は神様で、手違いで俺を殺してしまった。

←

おわびに、好きな物語の平行世界に転生してもらえる。

←

さらにおわびに、好きな願いをいくつか叶えてもらえる。（超能力がほしいでも可）

←

新しい人生を楽しんでネ。バイバイ。

よし、読めた！ そうと決まれば実行あるのみ！ まずは、この土下座してるおっさんをなんとかしねえとな。

「お、おい。いいから顔を上げろよ」

「あ、ああ。許してくださるんですね……」

顔を上げるおっさん。うん、見た感じ神様っぽいな。とりあえず、何も知らないふりして状況説明でもしてもらうか。

「あ、ああ。いいから、状況を早く説明してくれ」

「ああ……なんと慈悲深い……。ありがとうございます……」

んじゃ、そうゆうことで」

急に口が軽くなって帰ろうとしだすおっさん。

「って、おっさん待てやああ！！（ガッ）」

「ぐほっ！？ 首が……首が、締まっ……！！」

「おのれはああ！！ 状況説明もなしに何トンスラしようとして

んだコラアアア！！」

「や、わ、分かった！ 分かったから！ だからその悪魔のような手を離し……ぐほっ」

とりあえず、首を締め付けられ若干涙目のおっさんを放す。
少し予想外の動きがあったが、問題ない。

「さて。状況を説明しろや」

「は、はい！ 実は——」

～～説明中～～

「——というわけだ」

「ほっ……」

全部想定済みの説明を丁寧に聞いてあげた。唯一驚いたのは俺の死因ぐらいだな。なんだよ、ベットから落っこちて首の骨折るって。ダサすぎだろ。

「で、何か？ 俺はどうなるんだ？」

わかってはいるが一応確認する。

「誤って殺してしまったお詫びとして、別の世界に転生させてやる」

おっしゃ、予想通り！ あとは向かう世界と、チート能力設定だ

けだな！

「どうだ。異論はあるか？」

おっさんが確認をとってくる。つか、さっきから急に態度でかくなっただな。

「ま、死んじまったもんはしょうがねえ。別世界でもどこでも行つてやるよ」

「分かった。では、新しい人生を楽しめよ」

……………え？

「今から送つてやるから。そつから先のことは自分でなんとかしろよ」

……………え？

「んじゃ、さらばだ、少年よ〜」

ボタン↑床が抜ける音

ええええええええええ!!???

暗い闇の中、ひたすらに落下する感覚を味わいながら、俺はただ一つの思いを抱いていた。

（途中段階はああああああ！！！！？？？）

そして、俺は徐々に意識を失っていた。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

「ん
う
ん」

目が覚めると、俺は見たことある空間にいた。起き上がって回りを見渡す。いつもと同じ感触のベッド。馴染みのある天井。全く変わらない家具の配置。

てか……

（俺の……部屋？）

そう、紛れもない自室。本棚の本から、まだ買い替えていないブラウン管のテレビ（地デジ対応済）まで、全てが俺の部屋と同じものだった。

ここから導き出せる答えは一つ。

（……夢オチかよ）

そう結論付け、再びベッドに体を寝かせる。随分はっちゃけた夢を見たものだ。相当疲れて――

パチン、ブウン

「――っ!？」

急にブラウン管のテレビがつく音がした。誰も手を加えることなく、ひとりでに。

俺は背中に冷たいものを感じた。間違えてリモコンのボタンを押したのではないかと考えるが、そんな筈はない。リモコンは机の上にいつも置いてあるからだ。

俺は心の内に確かな恐怖を感じながらも、勇気をふりしぼり、ゆっくりとテレビのある方向に目を向ける。

「ヤッホー！ 覚えてる？ 俺だよ、お・れ——」

ブチン

そして、テレビを主電源から活動停止にさせた。

「……？ ……………？」

あまりの出来事に、言葉が出てこない。ダメだ、落ち着け。一旦落ち着くんだ、俺。さっきの奇抜なおっさんがテレビに映っているわけないだろう？ こっちに話しかけてくる訳がないだろう？ だから焦ってはいけんど、俺！ 焦ってはいけんど！

パチン、ブウン。

「おいおい。いきなり主電源切るなよ。びっくりするだろ——」

「焦ってはいけんどおおおお！！！」

ドゴオン！

思いつきテレビを蹴飛ばした。

「いったいなあ！ いきなりぶっ飛ばしてんじゃねえよ！」

「うるせえ！ 何人のテレビの中に潜り込んでやがんだ、おっさん！ つか、感覚共有してんのかよ！」

「黙れ、やんのか、ゴラァ!？」

「んだと？ やれるもんならやってみろやあ！」

……何故俺はテレビと喧嘩してるんだ？ 端から見たらただの痛い人だ。

「はあ……もういいよ。とりあえず、説明だけしてやるから、よく聞け少年」

「あ、ああ、分かった」

床に転がったテレビの前で正座して、おっさんの言葉に耳を傾ける。

「もうすでに分かっていると思うが、お前は死んだ人間だ」

「……夢じゃねえのか」

「ふむ……夢だと思うのであれば、一回部屋から出てみるといい」

「は？ まあ……いいけど」

俺は訝しげに立ち上がり、部屋の扉のノブに触れた――

バチバチバチ！

「ぎゃあああああああ――！」

——瞬間に全身に電気が走る。（リアルに）

「おい、おっさん！ どうなってんだよ！」

「ここは俺が作った特製の部屋だ。勝手に出ることはできないよ」

「じゃあ、何で出てみるとか言った！？ お前こつなること知ってただろ！」

俺はおっさん（テレビ）に激しく詰めより、沸き上がる感情をぶつける。もちろん、怒りの感情だ。

「ったく……。で、俺は今から何をすればいいんだ？」

「おお、そうだった。忘れていた」

おっさんは思い出したような表情をつくる。そして、一拍おいて言い放った。

「お前には今から“初期設定”をしてもらう」

「……………何て？」

「ほら、ぐずぐずするな。さっさとリモコンを取れ」

「リモコン？ 何でリモコン……………ま、いいけど」

俺はテレビに背を向け、机の上のリモコンを手にとった。

「リモコンを持ったな。ならそれをテレビに向ける」

「ん？ 向けるって……………あれ？ 何か出てきた」

テレビの画面に何か白い矢印……？　みたいなものが現れる。てか、もろパソコンの矢印だ。

「じゃあ、設定を開始する……って痛い！　カーソルを当てるな！　意外と鋭いんだぞ！」

「知るか！　さっさと始めろ」

「ったく……。じゃあ、まずは名前からな」

おっさんがそう言うと、テレビの画面が入れ替わり、ゲームとかでよく見る五十音表が出てきた。

……………

「……で、俺は何の設定をしてんだ？」

今までスルーしてた疑問を問う。

それに対し、おっさんは、

「何言っているんだ。お前の転生に関する事に決まっているだろう」

その発想はなかった——っ！

「下の名前を……って、どうした？」

「んだよ、これ……。完全にパターンが異常じゃねえか……。RP

Gじゃねえんだぞ……」

「何をぶつぶつ言っている。さっさとしろ。こっちも時間がないんだ」

「へーへー」

「下の名前だけを、カタカナで打て。漢字はこっちで勝手に変換する」

「はいよ……、文字制限5文字かよ……。しかも濁点も一文字扱いって、完全にゲームの主人公設定だな」

「文句を言わずさっさと入力しろ。早く帰って昨日録った『と○ダネ!』を見たいのだ」

「朝のニュースを二度見して何が楽しいんだ」

おっさんに急かされ、しかたなく俺は再びリモコンを向ける。
名前、ね。別に前の世界と同じでいいか。

ピッ……ピッピッ……

「ふむ。“シンヤ”か……。いい名前だ」

「そりゃ、どうも」

「では次。“希望する生物”」

「はいはい………は？」

訳がわからない俺を置いて、画面は再び入れ替わる。今度はいろいろと選択肢があるようだ。

えっと、選択肢の種類は……

- ・アオオサムシ
- ・アオクサカメムシ
- ・アオスジアゲハ

• • • •

わお。昆虫パラダイス。

「アオクサカメムシって何！？」

十音で並べている。親切だろ？」

「折に決まってるだろうが！」

『ドキ』に転生する人がいたりする」

「何その名前、キモツ!? じゃなく、ヒトは何処だよヒトは！」

「ヒトは哺乳類の八行だから、あと8627ページ先だ」

「親切じゃねえええええええええええ!!」

シャウトした。

2時間後

「よし、終わつたな。次は性別だ」

「ハア……ハア……お前……次あったら、絶対シバク……」

息を切らしながら、テレビを睨みつける。

画面の一番下までドラッグして、ページをめくる作業を延々と繰り返し、ようやく“ヒト”の選択肢を見つけ出したのだ。そのお陰で体力はかなり持つていかれた。

「時間なら心配ないぞ。ここは特殊な空間だからな、時間の影響は受けないんだ」

「いや、そうゆうことじゃねえよ」

うんざりしながら、テレビの“オス”のところにカーソルを持っていく。選択肢が少ないのはかなり助かる。

「よし、次で最後だ。“希望する世界”を選ぶ」

いよいよ最終設定。行き先だけが……

「あれ？ これで最後なんか？」

「何だ？ 何か文句あるか」

「いや、他にねえの？ ホラ、身体能力とか」

「そうゆう内面的のものは、コチラで勝手に設定する。転生者は一切関与しない」

「なんだ……。チート能力とか貰えないのか」

「それがウチの会社ゲフンゲフン……もとい神のルールだ」

「おい、今会社って言っただろ。確実に言っただろ」

今度はジト目でテレビを見つめる。

チート能力が貰えないのは残念だが、行き先か……。特に考えてなかったな。別にどこでもいいんだが……。

「なあ。『ランダム』ってアリか？」

「別に悪くはないが……。お前も物好きだな。どこに飛ばされるかわからないぞ?」

「別にいいだろ。それもまた楽しい」

「まあ、いい。ランダムだな」

カタカタとパソコンを打つ音が聞こえ、画面が始めの状態に戻る。おっさんの顔を見て、さっきの2時間無限ループのときの怒りが沸き上がるが、今さらとやかく言う気にはなれない。

「さて、これで設定完了だ。後悔はないな」

「あるわけねえだろ。強いて言うなら——」

「ん?」

「——家族に最後の別れくらい言つときたかつたな……」

急に親の顔が脳裏に浮かぶ。

ああ……。今頃息子が死んでるのを見て、相当悲しんでるだろうな……。

「……部屋の扉を開けたら外の世界に出れる。そうしたら、お前の転生生活のスタートだ」

「……そうかい」

「いくら後悔しようと、元の世界に戻ることは許されない。それだけは、肝に命じておけ」

「わかってるよ」

そう。もう自分の家族には会うことが出来ない。

だからこそ、新しい世界で精一杯生きなければいけない。

おっさんは、俺を見つめながら微笑み、

「そうか……。ならば行くがいい！ お前の、新しい――」

プルルル、プルルル

「あ、はい、もしも……。あ、部長！ お疲れ様です……。え、飲み会ですか？ はい、ご一緒させてもらいます！ はい、9時に『飲み屋 ノンノン』ですね。わかりました！ では、はい。（ピッ）

――新しい人生へと――」

「雰囲気だいいいいいいいい！！」

プッ

テレビの画面が黒く染まった。

「んだよ、あのおっさん。本当に神か？」

もうただの40代のサラリーマンだろ。もっと神らしい、神秘的な迫力ってものはないのか？

「……さて、部屋を出たらスタートって言ってたな」

一人呟いて、扉の方へ向かい、手前で立ち止まる。

「……新しい生活、か」

これは一人暮らしとか、結婚生活とか、そういう次元ではない。
“世界が違うのだ”。当然、危険が迫ることもあるだろう。だが…

……

「俺は楽しんでみせるよ。別れてしまった家族のみんなのためにも」

そして、新しい人生への期待を胸に、俺は目の前の扉のノブを握
り――

バチバチバチバチバチッ！！

「ぎゃあああああああああああああああ……！！」

電気ショックを受けた。

「おのれ……謀った……な（ガクッ）」

目の前が真っ暗になり、俺は意識を手放した。

そんなこんなで、

転生者生活スタート。

ブログ 神様は意外にRPG大好きな普通のサラリーマンかも知れない（後
誤字脱字、表現的に頭が悪いと思われる箇所、感想などありました
ら、いつでもどうぞ。

第一話 嫌われ者が真っ先に弾かれるのはどこの世界でも同じこと

—— “あれ” から、何年がたっただろうか

そんな物思いに更けながら、俺、あしはら したや 芦原晋也は、窓の外から降り注ぐ日光を浴びながら、教室の机に座って頬杖をついていた。
そんな俺は、回りの人間とは一線引かれた異質な存在だ。

俺は転生者なのだ。

いつの間にかポツクリと死んでいて、神の力によってあっさりと別世界に転生。あまりにもテンプレな展開で、二次小説にはありがちである。

つまり“あれ”というのは、勿論、転生直前の出来事だ。

だが、展開こそはテンプレそのものだったが、細かい内容はもう異常だった。

RPGのような主人公（？）設定の後、ドアノブに触れて電気ショックで気絶した俺は、目が覚めると赤ん坊の姿になっていた。

『もしや……虹の呪いか！？』と、アホな考えが浮かんだが、自分が転生したことを思いだし、そんな思考は鎖でぐるぐる巻きにし、復讐者（ウィー〇ディチエ）の牢獄に送りつけた。

生まれ変わって数年は苦勞の毎日だった。転生者であるがゆえに精神年齢が高かった俺は、回りの子供達の行動原理が全く理解できなかった。だから、回りと会わせるのが相当辛かった。

——ああ、あれから何年がたっただろうか

何はともあれ、俺は順調に成長していき、今はとある中学の第二学年の生徒としての生活を送っている。

……待てよ？

（今俺中二じゃん？ だったら今は転生生活開始から十四年じゃねえか……。俺はバカか？）

冒頭及び数行前の思考にあっさりと結論を出し、俺は一つ欠伸あくびをした。どうやら、あれから十四年も経ってるらしいぞ。人生、いと短きかな。

キーンコーンカーンコーン

授業終了のチャイムが校内に鳴り響く。

退屈な50分間を乗り切ったと思うと、自分で自分を褒め称えなくなる。

想像してみろ。実質的に大人な俺が、いまさらになって中二の二次方程式の講習を聞かされる気分を。

転生したのは高校生だから、精神的には俺はもう30歳だ。三十路で味噌字でM I S O J Iなのだ。そんな俺が今さら中学校の数学だとう？ オウ、シット！ ファツキン！

そんなわけで、俺は授業の大半は上の空だ。

そんな状態でも、50分間聞く意味もない授業を寝ないで受け流し続けるのはかなり精神を削られるのである。

ああ……コナ○君もこんな気分だったんだなあ……。しかもアイツは名探偵の知識を持ってながら、あたかも興味があるように小一のくそ簡単な授業を受けてやがる。なんて屈強な精神なんだ！俺なら一週間でウツになる自信があるぞ！

何はともあれ、今日の授業はこれで終了だ。後は退屈な時などない、個人の自由な時間だ。

俺は心を踊らせながら、『学園都市』の街並みへと足を踏み出した。

○○○○○○○○○○

『学園都市』

総人口は230万人弱で、その約8割が学生という学生の街、文字通り『学園の都市』である。東京都の未開だった西部を切り開いて、『記憶術』『暗記術』という名目で超能力を研究している。そのため、街の至るところで常識ではあり得ないような超常現象が起きていたりする。この街はいわば『超能力者の街』なのだ。

さらに、その技術の高さは、学園都市外の技術との差が20年〜30年の開きがあるほど進歩しているらしい。

俺は小一のとときにこの街に放り込まれ、親の援助もありながら、なんとか一人で生活してきたのである。

まあ、当然俺も能力者だ。

ちなみに、超能力にもいろいろとランクがつけられている。具体的には、

『無能力者《レベル0》』

能力が発言できなかった者。学生全体の約60%はこれに当てはまるのだとか。ただの一般ピーポーだ。

『低能力者《レベル1》』

多くの生徒がこの階級に属している。スプーンを曲げる程度の力。ほとんど日常での利用価値はない。

『異能力者《レベル2》』

『レベル1』とほとんど変わらない力。同じく日常ではあまり役には立たない。

『強能力者《レベル3》』

日常では便利だと感じる程度の力。能力的にはエリート扱いされ始めるレベル。

『大能力者《レベル4》』

軍隊において戦術的価値を得られる程の力。エリートの中でもかなり上位に匹敵する。

『超能力者《レベル5》』

学園都市でも7人しかない最強レベル。一人で軍隊と対等に戦える程の力。

という感じだ。

なお、レベルが高ければ高いほど、学園都市からの援助が多くなる。

また、超能力の街であるが故に、治安が悪い。路地裏なんかでは喧嘩やカツアゲなんかは日常茶飯事だ。それを制圧し、治安の維持をはかる警察のような組織、『風紀委員』と『警備員』が存在している。

以上が、俺が転生してから身につけた“知識”だ。

これで気付いたとは思うが、俺はこの世界のことは“全く知らない”。“完全に未知の世界”に俺は飛ばされたのだ。

おかしいだろう？　いくらランダムとはいえ、転生先のことを全く知らないってどうよ？　大抵の二次小説の転生者は原作知識持ってるぞ。

そりゃあ、ランダムでいって言ったのは俺だけどさあ……。せめて、俺の知ってる世界に転生させるよ、おっさんよ……。

ああ……。こんなことなら、素直に『バカ〇スがいい！』って言えばよかったよ。俺も召喚獣使って戦争したかったよ。何でランダムとか言っただ！　俺のバカ！

……………話を戻そう。

俺は小六のときに強能力者《レベル3》にまで達し、それ以来、身体検査〔能力を測る検査〕は真面目に受けていない。何でかって

？ そりゃあメンドクサイカラサ！

だってレベル3でも十分な援助は貰えるんだぜ？ だつたら無理してレベル上げる必要はないだろう？ メンドクサイダロウ？

あと、中1のときに研修期間を乗り越え、風紀委員なったりした。この世界をよく知るためだ。なれるもんはなつておく。

てなわけで、俺は今、俺が働く風紀委員の支部に向かつていたところなのであった。何か支部長が俺に重要な連絡があるのだとか。そのくらいメールでもなんでも出来ただろうに。俺の時間を食い潰しやがって……！ しょーもない話だつたら絶対ツブス！

そんな苛立ちを胸の中で感じながら、支部の扉を開けた。

「——お前、明日から来なくていいから」
「……………は？」

支部長からのいきなりのクビ宣告だった。

いやいやいや、ちょっと待て。俺なんか悪いことしたか？ クビになるような行動とったか？ そら、仕事はよくサボるし、支部長に対しても普通にタメで喋るけど、それを除けば職場でゲームばかりやって始末書書かされまくってるだけのヤンキー風金髪風紀委員じゃねえか……アレ？ クビにされてもおかしくなくね？

てか、ホントにクビにされんの？ ここも人件費削減とかで社員

をリストラしないといけない状況なのか？ 転生前の世界でも、親父がリストラされてたっけ。俺も現在進行形でリストラされそうなんだけど、こういうのって、遺伝的に染っていくもんなのか？ 親父がリストラ常習犯だったら、子もそうなるとか。アレ？ でも、それは前世の親父であって、今の親父はリストラなんかされてないよな……。てか、俺今何の話してんだ？ いつの間に親父のリストラ遺伝説について考察するはめになってんだ？ てか、この年でリストラされんのは将来が辛いぞ。今日から食っていくのも一苦労だし、これから年をとっていくと再就職にも不利になる。俺は、俺はどうすればいいんだああああ！

「リストラ……遺伝……親父……？（プシュー……）」
「ついに壊れたか、芦原のやつ。オラ、起きろバカ（ゴスッ）」
「リストラ……リスどぶっ！？」

はっ！？ 俺は今まで何を！？

「痛う……。あ、支部長……」
「ふう。なんとか直ったようだな」
「『治る』の漢字が違う気がする……じゃなく！ さっきのどういうことだよ！ 何で俺がクビなんだよ！」

バン！と机を叩き、支部長に噛みつかんばかりの剣幕で問いつける。

すると、支部長は呆れた表情で一言。

「バカか、お前は」

その言葉に俺が疑問符を浮かべていると、支部長は、はあ、とため息をついて、言葉を紡ぐように続けた。

「風紀委員にクビもクソもあるかよ。ちったあ冷静に考えろ」
「は？ い、いや、でもさっき『もう来なくていい』って……」
「異動だよ、異動。明日からは別の支部で働けってこと」
「え」

あ、そゆことね……。なんだよ、焦って損したぜ。

「ま、俺としちゃあ別にクビにしても構わねえんだが……？」
「は、はは……。やだなあ支部長。そんなご冗談をおっしゃるなんて」

「冗談じゃねえぞ」

ピシヤリと言い切る支部長。焦っておいて損はなかったようだ。

「で、何で俺が異動なんだ？ この前新人の支給あっただろ」
「いや、その支給の話なんだけどな」

そう前置きをする、支部長は俺の方を向きながら頬杖をついて内容を話始めた。

「なんか上の方のミスで、一ヶ所だけ新人が一人も来ない状態になっちゃってさ。だから、何故かやたらと人数多いここから異動させるってワケ」

「だったら新人を異動させりゃいいじゃねえか。何でワザワザ俺が――」

「それはお前がこの支部に必要とされてないからだ！」
「はつきり言うんじゃねえよ！」

とはいえ、その返答は薄々予想していた。この性格最悪な支部長

(馬)ならこんなぶっ飛んだ返しも――

「誰が(馬)じゃボケエ!」

「ぐぼあっ!?!」

顔面に飛来する支部長の固い拳。
サイコメトリ

しまった。支部長の能力が読心能力だってこと、すっかり忘れてた。

あれ? でもアレって確か対象に触れてないと発動しないんじゃない?
……?

俺がたった今起こった謎現象に頭の中で首を傾げていると、支部長が再び口を開いた。

「ったく……。向こうの支部には伝えてあるし、お前の学校の転校届けも、転入先への編入届けも出しといたから、心置きなくここを去れ。そして二度と戻ってくるな」「テメエ……。実は俺をここから追い出す気満々だっただろ。てか、人の転校届け勝手に出してんじゃないよ」

「ついでにお前ん家の引っ越しもすでに終わらせてある」

「ガチでふざけんなよ!? 何!? もう俺ん家には何もねえの!」

「安心しろ。家具の配置はどこも弄ってはいない」

「そういう問題じゃねえよ! 本人の許可なく家の物持ち出すなつて!」

「キッチンの調理器具から、床に散らばってたエロ本まで全て完璧に配置した。感謝しろ」

「プライバシーイイイイイ!! テメツ、何言っちゃってくてんだあああああ!」

誰が感謝なんかするかあああああ!! ってホラ、支部の人が

奇異の目で俺を睨んでる！ やめろ！ そんな目で見るなあああ！

「おい、お前がぎゃあぎゃあと騒ぐから変な目で見られてるじゃねえか」

「お・ま・え・の・所為だ！ 簡単に人の秘密喋りやがって！」

「そんなことはどうでもいい。あと、引越し先と転校先は後でメーるする」

「どうしてもよくねえよ！？ 俺の社会的信用に関係する問題だぞ！」
「用件はこれだけだ。もう出ていっていいぞ。てか、さっさと消えろ」

「ひどくね、それ！？ 元部下にかけ言葉じゃねえよ！」

コイツは絶対上に立つ人間には不適切だと思う。

回りを見てみると、支部長の発言で俺への視線がさらに悪化した気がする。もはや同情するような奴なんか一人としていない。くそっ！ そこまでして俺に消えてほしいか！

「ああ、わかったよ！ そこまで言うなら今すぐにも出ていってやるよ！」

「だったら最初からそう言え。そして早く出ていけ」

「ぐっ……！ 後悔しても知らねえからな！」

「はいはい、じゃあな。……よし、塩撒くぞ」

『『『はい』』』

「みんな嫌いだあああああっ！！」

俺は泣きダツシュで支部を後にした。

○○○○○○○○○○

「本当によかったのですか？ 支部長」

「んあ？ 何がだ？」

「芦原君のことです」

「別にいいんじゃない？ 支部内でもいい印象なかったからな、アイツは。現にみんなも必死こいて塩撒いてるし」

「で、でも、彼のお陰でここ最近の近辺の犯罪は激減しているのですよ？」

「そうだな。……なあ、アイツの能力のレベル、知ってるか？」

「どうしたのですか、急に？ ……確か、彼は強能力者《レベル3》でしたよね」

「ああ、確かにそうだ。アイツは能力はレベル3。書庫でもそう記されてる」

「それが、何か？」

「俺はアイツがレベル3だとは思わない。少なくともレベル4。もしかするとレベル5までいくかもしれない」

「それは一体……！？」

「だから上もアイツを異動させるように命じたんだ。街の中心部の犯罪抑制のために……」

「……そうゆうことだったのですか」

「ああ。……アイツは逸材だ。こんな端っこの支部で働くにはもったいないだろ」

「人数は無駄に多いですがね」

「ははっ。確かにな。さて、人数もへったことだし、これから忙しいぞ！」

「とはいえ、何もしない人が出ていただけですので、あまり変わりませんが……」

「否定できないのが凄いな……」

第一話 嫌われ者が真つ先に弾かれるのはどこの世界でも同じこと（後書き）

誤字脱字、その他もろもろあればご指摘お願いします。

第二話 人助けは自分の利益を最優先として初めて成立するもの也（前書き）

記憶が正しければ、ここで原作キャラが登場するはず。

第二話 人助けは自分の利益を最優先として初めて成立するもの也

ごきげんよう、諸君。主人公の芦原晋也だ。

さて、この小説もそろそろ三回目といったところか。これを読んでいる読者の方々には本当に感謝している。これからよろしく頼む。

……なんかキャラが違う？ その辺は気にしないでくれ。

ついでに、これはメタ発言でも何でもない。ただのナレーションだ。

ホラ、転生ものつてよく二次小説になるだろ？ 俺も一応は転生者だから、これを読んで下さっている方々への御礼ぐらいいは言っておきたいなど。俺は見た目金髪ヤンキーだから、こういう場面で好感度を上げておかないと、いつ社会から淘汰されるか知れたもんじやないからな。

しかし、だ。これがもし二次小説になっていなかった場合、俺はもう完全にイタイ人だ。脳内でわけのわからないナレーションをしている厨二病でしかない。好感度は余計に降下してしまう。

だから俺はこの世界が二次小説として描かれていること、そしてこの場に高レベルの読心能力者、もしくは支部長サイコストーリーがいらないことを激しく願っている。マジで。ハズイから。

さて、こんな妄想発言はどうでもよく。

俺は現在、学園都市の第七学区にいた。

俺が前にいた支部から追い出されてからものの数分できたメールによると、俺が通う学校は“柵川中学”という、どこにでもあるような普通の学校。家はそこからすぐ近くのアパートらしい。家が学校に近いことはありがたい。

ついでに、俺がまた風紀委員として活動するのは明後日からいいらしい。だから早いところ新居へ向かって、のんびりこの地域の散策でもしたいところだ。

したいところ……なのだが……

「ここは……何処だ？」

早速迷っていた。

「おつかしいな。ここを抜ければ近道なはずなんだけどな」

俺は一人呟きながら、路地裏をトボトボと歩く。近道どころか路地裏を抜けることすら出来ない。

面倒だからと近道を使おうとしたのが悪いのか、そもそも道が間違っているのか。原因はわからないが、とりあえず早くこの状況から脱出したい。

『だからさ。ちょっと付き合ってくれればいいんだって』

『ちよつ、やめてください!』
『ハハハ! やめないよぉ!』

俺が悩んでいると、なにやら男女の不穏な声が聞こえた。俺はその声と内容から、女の子が複数の男に絡まれていると推理した。

そして、思いついた。

「そうだ。あの人たちに道を聞こう!」

俺は自分自身の名案に感動しながら、声のする方へと向かった。

○○○○○○○○○○

サイアク……。

家まで近道しようと裏道使おうとしたのに、悪そうな男の人達に囲まれちゃうなんて……

ここ、さっき言っみたいに裏道だから、人なんて滅多に通らないし、たまたま携帯家に置いて来ちゃったから風紀委員に助けも呼べないし……。ああ、もう! 私どうしてこんなタイミングで近道しようとか考えちゃったの!?

隙を見て逃げ出すにも結構な人数だし……。これって、あたしも
しかして絶体絶命？ てか、本気でヤバくない？
こういうときでも能力とか使えたらな……。

『こんな上玉捕れるなんて、俺ら結構ついてるよな！』
『よし！ 早いとこ持って帰ってヤツちまうか！』

って、マジでヤバイじゃん！

もう誰でもいいから！ 誰か、助けて――

「あゝ、ちよつといいか？」

あたしの願いは天に届いたのだった。

あたしは救世主にも思えたその声の主の方へ目を向けた。
そこにいたのは……

金髪。ピアス。ダルそうな目つき。適当に着こなしたような服装
(Tシャツ＋ジーパン)。

……ダメだ。絶対マトモな人じゃない。

見た目はあたしを囲っている男の人達となんら差はない。たぶん、
この人も仲間なんだろう。見張りをしていて報告でもしにきたのか。
ボス的な人から伝言でも頼まれたのか。

どちらにしても絶体絶命な状況にはかわりなかった。
あーもー。マジでどうしよう――

『なんだデメエ？ 見かけねえ顔だな』

『邪魔してんじゃないやねえぞゴラア！』

え……？ この人達、知り合いじゃない？

だったら、本当に助けに来てくれた人だったりして！

あたしは淡い期待を持って、その金髪の人次の言葉を待つ。

「いや、このアパートなんだけどさ、どこにあんのか知らね？」

道訊ねた――つ！！

てか状況判断！ あたし絡まれてる！ まず助けるべきじゃないの！？ もしかして、あたしのこと見えてない！？

「いやさあ。俺今日ここに来たばっかだからさ、道とか全然分かんないじゃん？ だからできれば道案内とか教えてくれれば嬉しい」

『ああ！？ んなの知るかよ！』

『とつとと消えろよ殺すぞ！』

さらに激昂して金髪の人にガンを飛ばす男の人達。金髪の方は頭がおかしいんじゃないかな？ いい加減この空気に気づくべきだと思っ。

「くそ……。コイツらも最近引越してきたばっかのやつか……。お互い大変だな」

いや、そうゆうことじゃない！

「んじやいいや。そっちの女の子に聞くとするか」

って最初から気づいてた！？　なら助けてよ！　順番がおかしいでしょ！

『おいテメエ……。あんまし俺らをなめんじゃねえぞ……。！』
『ケンカ売ってんのか！』

男の人達のボルテージもじわじわ上がってきてる。そろそろ空気読んで帰るべきじゃない？　いや、帰ったらダメだけど！

「ケンカか……。そういや最近やってないな。じゃあ、ケンカ売ってるってことでいいや」

ここでケンカ売った！？　どうしよう、もうこの人の考えが分からない！

『このやろ……。ふざけやがつて！』
『あんまり甘く見てると、ケガすんぞオラア！』

男の一人が金髪の人に殴りかかる。あたしは思わず手で自分の目を覆った。

そして、骨がぶつかる音が響き、金髪の人が地面に倒れ伏す――

——ことはなかった。

『はあ！？　なんだこれ……動けねえ！？』

指の隙間から覗くように確認すると、男の人の拳が金髪の人の顔の目の前で止められており、男の人は必死にその腕を動かそうとしていた。

「ったく……めんどくせえ」

そして金髪の人が頭を掻きながらそう呟いた瞬間、

『ぐふっ！？』

男の人は宙をまい、あたし達の上空を通り越し、後ろの地面に背中から落下した。金髪の人は依然として頭をボリボリと掻いている。

『な、なんだデメエ！　何しやがった！』

『能力者か！　何の能力だ！』

男の人達は仲間が吹き飛ばされたことに狼狽えている。あたしも何が起ったのか理解ができない。何故なら“金髪の人は頭を掻くこと以外、何も動いていなかった”のだから。

それに対し、金髪の人は答えた。

「能力？ 違えよ。これは俺の友達の仕業だ。今ここにいるだろう？」

『『『………はい？』』』

全員、その返答にそろって首を傾げた。

「紹介しよう。こいつはタケマル。身長210cm、体重110kgで、ウェイトリフティング部所属の14歳だ。こいつは力が凄く強くてな、コンクリート程度ならデコピンでも砕けちゃうんだ。100mを0.2秒で駆け抜ける俊足の持ち主で、ジャンプ力は軽く30mは越すな。だけどシャイなのか、体中に光学迷彩のスーツを着込んでるから、俺以外誰も姿を見たことがないんだ。だから皆、仲良くしてやってくれ」

できるか———っ！！

ていうか、そんな人間じゃないし！ もう人類の限界を易々と越えてるよタケマルさん！ 黒神め○かでも100m0.2秒は不可能だよ！

『何わけの分かんねえことぬかしてんだよ！』
『嘘つくにしても、もっとマシな嘘つけや！』

それに関してはあたしも激しく同意したい！

「言つとくが嘘じゃねえぞ。あと、俺に危害が加わりそうになったら、容赦なく吹き飛ばすから」

『ほう。だったら吹き飛ばしてみろやあ！』

今度はスキンヘッドの人が金髪の人に殴りかかる。

だけど……

グルン！

『うぉぁぁあつー！』

到達する前に、“何かに投げられたかのように”空中を一回転し、地面に叩きつけられた。

『テ、テツ！？』

「だから言っただろうに。俺に危害加えようとしたらそうなるって」
『な、なんなんだよコイツ！』

男の人達がうろたえ始めた。あたしにも何がなんだか分からない。まさか本当に透明人間みたいなのがいるの！？

「さて、次は誰かな？ タケマルの奴、だいぶイラついてるから、今なら誰でも相手してやれるそうぞ」

金髪の方はユラリユラリと近づきながら挑発する。そんな彼を恐れて、腰が引けている男の人達。

『ひ、ひい！ く、来るな！』

『く、くそう！ 俺はもう知らねえ！』

『てめえ！ ひ、一人で逃げんな！』

そして、一人が逃げ出したのを皮切りに、一気にこの場から走り去って行った。

結果、残ったのはあたしと金髪の人二人だけ。

「……逃げるんなら最初^{はな}っから突っかかってくんなつーの」

彼は一つため息をついて、ダルそうな目をあたしに向けた。

「あー……。えっと、ケガねえか？」

「え、あつ、大丈夫です！ 全然！」

いきなりの質問について語気が強くなってしまった。

「こちらこそ助けて頂いて、ありがとうございます！」

「いや、礼は俺じゃなくタケマルに言ってくれ」

そう言いながら何もない空間を親指で示す金髪の人。いや、あたしには何も見えませんが……？

一応、尋ねてみた。

「あの、失礼ですか……タケマルさんって、ホントにいるんですか？」

「いるわけないじゃん」

「あ、即答ですか……」

なんか、訊いたあたしがバカみたい……。冷静に考えたらそんな人、透明人間じゃなくてもいるわけないじゃん。

「……え？ それじゃあさっきのはどうやって……」

「ん、ああ、そりゃあ——」

グルン！

「ひゃあああああつ！？」

「——こうゆうことだよ」

い、いきなりあたしの体が回転した！？　せめて合図ぐらい出してもよかったんじゃないの！？　って、あたしの体まだ浮いてる！
てか回転！　た、助けて！

「つーことで、俺の能力はただの念動能力^{テレキネシス}。さっきまでのヤツも、俺の能力でそれっぽく見せてただけ。オーケー？」

「わ、わかりましたから！　早く下ろして〜！」

あたしが叫ぶと、金髪の人「しかたないなあ」と呟いて、回転を止めたあと足からゆっくりと下ろしてくれた。

頭がくらくらする……。縦横の回転に捻りも加えられたからね……。もう真っ直ぐ立つことも難しいよ。

「で、さあ。とりあえず道を聞いていいか？」

「あ、ああ……。そういえば……。そんなこと、言っていましたね……」

「……どうした？　気分が悪いのか？」

「……あなたの所為です」

ホントにこの人には回りを見る能力ってゆうのがないの？　ただ単に天然なだけ？

「でさ、ここのアパートなんだけど……」

あたしの発言は完全無視して携帯の液晶を見せてくる。そこに記された住所はあたしがよく知る場所だった。

「ここって、柵川中学の近くのアパートですよね？」

「そうだけど」

「だったら、この路地を抜けて左に真っ直ぐ行けば見えると思います」

「おお、そうか！ サンキュー！」

ニツパリとあたしに笑ってみせる金髪の人。その笑顔は普通の時の見た目とは全く違う、人畜無害で平和的なものだった。

「あ、そうだ。名前、何ていうんだ？」

「あ、あたしのですか！？」

「他に誰がいるんだ？ 俺の恩人なんだから名前ぐらいは知つとかないとな」

「え、えゝ……つと」

どうしよう……。知らない男の人に名前教えるのって大丈夫なのかな……。でもなんだかんと言ってあたしの恩人でもあるし、信用できそうな人だから……。――

「ああ、名乗ってもないのに訊くのは失礼だよな。俺は芦原晋也。今日付けでここに来た新参者だ」

あたしが迷ってる隙に、向こうの方が先に名乗ってしまった。これはこっちも名乗らないといけない空気……。――

「さ、佐天、涙子です」

「オツケー、シテンさんだな。また会うかしんねーから、そんなきはよろしくな」

「いや、あたしシテンじゃなくて佐天なんだけど……って聞いてます？」

あたしの指摘をあつさりを受け流し、金髪の人——芦原さんはあたしに背を向けて歩き出した。

結局、この人はなんだったのだろうか。見た目はヤンキーそのもののなのに、サラッと現れて悪者を追っ払って去っていく。まるでヒーローのような印象を、あたしは歩いている芦原さんの背中に感じた。

あたしはその背中に、一言言葉を投げかける。

「あの一、そっち逆ですけど」

……

……

……

芦原さんはクルリと踵を返すと、気まずそうに目をそらしながら

あたしの横を走って通りすぎて行った。

（ホントになんだったの、あの人？）

浮かんできた疑問を頭の中で反芻し、あたしも同じように歩き出した。

第二話 人助けは自分の利益を最優先として初めて成立するもの也（後書き）

誤字脱字、矛盾点、感想などありましたら、是非ともお願いします。

第三話 弱味を握られたらとりあえず記憶or存在を抹殺 (前書き)

タイトルの(仮)を取りました。

第三話 弱味を握られたらとりあえず記憶or存在を抹殺

「暇だあ……。やることねえ……」

ども、芦原つす。いやー、休日ってやることないと、本当に暇つすよねえ……。こういうときに遊べる友達がいなくて結構ツライつすわあ……。引っ越してきたばかりの奴なら一回はぶち当たる壁つすよね。でも、それを超ええるか否かでそこから先の学校生活は変わってくると思うんすよね。わかります？

え、またキャラが違う？ 気にするなって言っただろうが、埋めるぞコノヤロウ。何だ、テメエ！？ そこは文句言わずに暖かい目で見守るのが二次小説の醍醐味だろうが！ 違うか！？ アア！？ いいか、次のオープニングのときに『キャラが変わってる』とか言ってみろ！ 来週ぐらいにお前宛にエロ本が届くことになるからな！

……俺は誰にキレてたんだ？ とうとう脳細胞の氷河期に突入したか？ こりゃあもう精神科に見てもらう必要があるそうだな。明日ぐらいに行くか。あ、でもこっからだったら結構遠いな、病院。

なんて、一人でわけのわからない妄想しても暇が潰せる訳もなく

……

「ああ……暇、だあ……」

俺は新居でゴロゴロするしかなかった。

風紀委員の仕事は明後日までないとはいえ、転校先の学校、柵川中学には明日から行かなくてはならない。

だから本来ならば、教材や制服の準備などで暇は無くなる筈なのだ。

だがしかし、明日はその学校では身体検査システムスキャンがあるとのことらしいではないか。つまり、『教材の準備など』が全く必要ないのだ。制服の準備は必要だが。

その制服の準備も終わってしまった俺は何もするアテがなく、結果、フローリングの上で体を横にすることしか出来なかったのだ。

「なんか……やることねえのか……？」

思い返せば、かれこれすでに一時間程フローリングの感触を楽しんでいた。これでは流石に不健康だとか考えた俺は、とりあえず冷たくて気持ちいい床から体を離し、何か退屈しのぎになりそうな媒体を探すことにした。

「マンガ……エロ本……マンガ……エロ本……エロ本……エロ本……エロ本……エロ本……エロ本……エロ本……エロ本……エロ本……」

……駄目だ、マンガとエロ本以外のアイテムが見つからない。てか、マンガも結構際どいやつだし、どんだけ性欲強いんだ俺。

注意書きとして言うておくが、俺は“身体的には”中学二年の筈だ。もちろんのこと、18歳には程遠い。

だが部屋の中にはR - 18の冊子が埋め尽くさんばかりに散乱している。

「とてもじゃねえが、人には見せられねえよな……」

これを知り合いに見られた暁には、俺は『見た目ヤンキーの風紀委員』から『ただの変態ヤンキー』へとランクアップ(?)してしまつ。これでも世間体とか気にしてる俺にとってはかなりの大打撃だ。なんとしてもそれだけは避けておきたい。

そんな切なる願いを胸にしまいこみ、再び暇潰し探しに没頭する。

「エロ本……エロ本……マンガ……エロ本……DVD？」

ここに来てまでもそんなやつ発見！ これで退屈タイムとはおさらばだ！ まずは題名を確認しよう！

手に持ったDVDのケースを裏返し、そこに書かれた題名を見る。

『淫乱女子高生との秘密の夜 〔野外編〕』 ↑ もろR - 18

「俺ん家こんなばつかかあああああ!!」

いや、確かに買ったのは俺だ。買ったのは俺なのだがっ！ 流石にここまで侵食してるとは思ってたすよ！ マチ驚愕す！
やべ、最初のキャラに戻った!?

「はぁ……」

改めて自分のエロさを実感し肩を落としていると、

ピロピロピロリン、ピロピロピロリン

軽快な電子音と共に、ベッドの上の携帯が小刻みに振動した。

「まったく、誰だよチクショウ」

俺は手を伸ばして携帯を手取る……ようなことはせずに、能力を使って自分の目の前に携帯を移動させる。今携帯は宙に浮いた状態だ。

そのまま手を使わず携帯を開けると、液晶には音声着信の知らせと、『支部長』の三文字が。つまるところ、支部長から電話がかかったのだ。誰でもわかる。

不穏な気配を感じつつ真ん中のボタンを押し、そのまま右耳の前に移動させる。もちろん、まだ手は使っていない。

『よお、エロ本マニア。新しい我が家はいかがかな？』

携帯から流れるム力つく音声。

「本当に最高だよ、堅物野郎。また暇があつたら遊びに逝^きてもいいんだぜ？」

『いや、結構だ。そんなエロ本だらけの部屋に行ったら、脳髓に支障をきたすかもしれないからな』

「そりゃ良かった。俺も頭だけが無駄に固え貧弱ゴーレムみたいな奴が来るのはごめんだ」

『「……………（無言の一時）」』

……まあ、今日のところはこの辺にしておいてやるか。

向こうも同じ考えのようで、今度は普通に話を切り出してきた。

『お前、今回の身体検査は真面目に受けるよ』

「はぁ？ 何で」

『知らん。何かウエの連中がお前に目をつけたつぼくてな。お前が真面目にやらなかったら、俺がいろいろ言われるんだ。だから真面目にやれ』

「嫌だ。何で俺がお前のために動かなきゃならねえんだよ」

そんなのは冗談でも嫌だ。面倒くさいとか、それ以前に奴にとつてプラスになるようなことが嫌だ。別にメリットがあるかと言えば、そんなことはない。ただ、生理的に受けつけられないのだ。

とはいえ、圧倒的に不利な状況下においては、断ることは出来ない。

『……お前、そんなこと言っているのか？』

「……どうゆう意味だ？」

挑発するような口調の支部長。背中に冷たい汗が流れる。

『そつえば言うの忘れてたんだが……』

「……？」

『お前の引越しは引越し業者がやったんじゃないくて、手が余ってた風紀委員がやってくれたんだよな』

あ、なんかすつげえ嫌な予感。

『で、俺も暇だったからカメラ持ってそいつらに同行して——』

「おおおおオッシャー！　れ、れれレベル5なんてよよヨユーだぜ
コンニャロー——！」

『——そうか。わかってくれて、なによりだ』

ピツという簡素な音を最後に会話が途切れる。

「あ、ああああの野郎おお……！」

怒りと絶望の混じった呻き声を洩らす、芦原晋也、夏の日の夕暮れ。

○○○○○○○○○○

ハロー、芦原だよ。今転校初日だからとかで職員室にいるよ。

入ってきたら教師から、可哀想な人を見る目で見られたよ。何でだろうね。ただ金髪で見た目がヤンキーなだけなのにな。

大体さ、転校前の資料とか貰ってるわけだからさ、俺は一応高位能力者ってことぐらい知っててもおかしくないよね。だからそんな慈愛のこもった目で見るのは止めてくれませんか？

「君が芦原君だね？」

若い男の先生が来て口を開いた。

俺は小さく頷いて肯定の意を表す。

「まあ、レベルが上がらなくてやさぐれるのはわかるさ。だがな、諦めずに努力すれば、絶対に成果は出るからな」

ああ、なるほど。この人たちは、俺がレベルが上がらないからグレたと思ってるんだな。つまり、能力のレベルがどうであっても、見た目がヤンキーならそういう目で見られてしまうのか……。

「てめえらコノヤロオ！！」

「う、うわ！ どうした、芦原！」

「どいつもこいつも見た感じで判断しやがってえ！ 金髪がそんなに悪いか！？ 俺のアイデンティティーはそんなに悪いことなんかアア！？」

「ま、待つんだ芦原！ 誰もそんなことは——」

「言わなくても分かるわあ！ 何年支部長と働いてきたと思ってんだああ！」

「誰だよそれ！ いや、マジで待つ………ちょ、机飛ばすなああああ
ああ……—」

閑話休題。

俺は教師に引っ張られるような形で、測定場まで連れてこられた。ハンマー投げのフィールドのような形で、横に置いてある重りを遠

くに投げる検査だ。
テレキネシス

念動能力の身体検査には大きく分けて三種類ある。鉄板を曲げて、その角度を測る精密性の検査。物体を浮かせて、その時間を測る持続性の検査。そして今俺がやろうとしている、物体の投擲による威力性の検査。

無論、物体の重さと飛んだ距離で評価するのだが……

「……狭くね？」

見たところ、フィールドの距離は大体70m程。ハンマー投げの選手なら軽々投げてしまう距離だ。

下を見てみると、金属の直方体をした重りには、白い文字で『20kg』と書いてある。軽すぎないか？俺なら20kg程度の重りぐらい、普通に片手で持ち上がるぞ。それを投げれるかは別として。

かなりの間、身体検査を受けていなかった所為か、設備がかなりショボく感じる。

でもこれが普通なのかも知れないので、一応教師に訊いてみることにした。

「なあ、この設備ってこれで普通レベルなんか？」

「いや、少し低レベル用かな」

本当にショボいやつなのかよ……。俺は嘗められてるのか？

「おい……俺は仮にも強能力者《レベル3》だぞ？こんなんで測定できるのか？」

「それは大丈夫だ。初速度や落下スピードからも計算できるから」

……本当に大丈夫かよ。

それと、一番訊きたかったことがもう一つ。

「あと、なんかギャラリー多くな？」

再びフィールドの方に目を向けると、まるで空港での有名人の待ちのごとく人が並んでいる。ワクワクして測定を心待ちにしている奴や、俺をチラ見して怯えるような表情をする奴など、様々だ。しかも校舎の方にも、窓から身を乗り出して測定を見ようとする奴が。

正直言つて、これほどやりにくいものはない。オリンピックじゃないんだから、測定くらい一人でやらせてほしい。

「そりや今日最後の測定だからね。嫌でも目立つだろうよ」

「何で最後……ああ、転校生だからか」

あっさりと出てしまった答えに嘆息する。ただでさえ面倒だといふのに、うるさい外野がいるために、さらにやる気が削がれていく。

「ダリいな……。帰りてえな……」

「そんな非活動的な台詞吐かずに。早く測定終わらせるぞ」

「へーへー」

適当に返事を返して、円形の投擲場に向かった。周りの声援がやたらとウザい。

《――準備ができ次第、測定を開始してください》

マイクの音声で女の教師の指示が流れる。

(……この重りをギャラリーに向かって投げたら面白いかな)

なんて考えが浮かぶも、一瞬で深い泉に沈めた。そんなことをして万が一、人が死んでしまったらどうするのか。いや、万が一でなくとも人は死ぬが。

いつまでもくだらないことばかり考えてられないので、とりあえず足下の重りを能力で頭の位置まで引つ張り上げた。

『すげえ！ あの重りが簡単に持ち上がったぞ！』

『アイツ、高位能力者か！？』

『あの人、すごい！』

そして、謎に沸き上がるギャラリー。

鬱陶しい……。どうして頭の悪いガキ共はぐちゃぐちゃとはしゃぐことしかできないんだらう。教師も黙らせるよ、軽くスルーしてんなよ。

『アイツ、レベル3はあるぜ絶対！』

『おっし、俺あとでアイツに喧嘩売ってくるわ』

『ハハハ、やめとけて。ボコボコにされて終わりだろ』

「うるせえぞテメェら！ 用がねえ奴はさっさと帰れよ！」

《芦原君。早く測定を開始してください》

「何でだよ！ 測定の前にまずギャラリーをどかせよ！」

面倒くせえ……。何で俺が声張り上げてんだよ。そのわり全然黙んねえし……。

よし、いいこと考えた！　とりあえず測定だけさっさと終わらせ
て、そのあとギャラリ―達を半殺しにしよう！　教師達は記録の整
理とかで目が向かないだろうし、他に邪魔するような奴は誰もいな
い。まさに完璧な作戦だ！

俺は宙に浮かせた重りを身体の近くに寄せた。そして――

「おらあああああああああ！」

——全力で前方向に発射した。

地上1m辺りを恐るべきスピードで突き進んでいった重りは、誰の目にも写ることなくフィールドの最端まで到達し——植え込みの木を根本から断ち切り、後ろのコンクリートの壁を貫通、粉々に打ち碎いた。

グリングリンと宙を舞った10mを越す樹木は、校舎の三階程の高さまで上がり、そして落下――

つて、

(ええええええええええええ！！？？)

やつべえええええ！　設備ぶつ壊しちまったあああああ！
？　これじゃ教師に何言われるか分かったもんじゃない！　最悪の
場合、この話が支部長に伝わったりして……

「うがああああああああああ！！！！！」

叫び声を上げながら、狼のようにギャラリーに突っ込んでいく芦原晋也！ 目的は制裁なんかではない！ 記憶の抹消だ！！

「な、何が起こった——ってうわあ!？」

『ヤンキーが凄い形相で迫ってくる!？』

『ちよっ……俺達は何をしたって——ギャアアアアアア！！』

「てめえら全員くたばれええええええ!!」

「理不尽だあああああ！！！！」

ギヤアギヤアと沸き上がる悲鳴。

もうもうと立ち上る砂煙。

ビュンビュンと宙を飛び交う人間。

そんな超絶大乱闘の最中、アナウンスによる機械的な音声流れ

《記錄》

発射初速、
240 m / s e c

最大干涉質量、推定25000000g

精密性能、SSS

総合評価、レベル5

しかし、激しい乱闘による騒音にかき消され、俺の耳には届かなかった。

第三話 弱味を握られたらとりあえず記憶or存在を抹殺（後書き）

誤字脱字、矛盾点、感想などありましたら、是非ともお願いします。

かなり分かりにくい主人公紹介……って何故このタイミングで出した？（前書き

タイトル通りです

何故このタイミングで出したんだろう……

かなり分かりにくい主人公紹介……って何故このタイミングで出した？

あしはらしんや
芦原晋也

178cm 70kg 14歳

・容姿

金髪。手短な金髪のヤンキーを想像していただければ、ほぼ正解。顔はそこそこのいい方だと思われ。筋肉質な体格。普通のチンピラ程度なら素手で倒せる。

・能力

テレキネシス

念動能力。小学生の時にレベル3に到達、そこからは身体検査は受けていない。能力は日常的に多用している。

・武器

近くの石ころ、そのへんのゴミ、相手の拳（複数時）つまり、何でも武器にできる。

・嫌いなもの

退屈、面倒なこと、支部長、キャベツ、人を見た目（特に頭髪）だけでヤンキー扱いするやつ

・好きなもの

エロ本、R-18のDVD、テトリス、寝ること、みかん、人を中身で判断してくれる人。

・座右の銘

『利あらずして動くべからず』

・その他

風紀委員に所属。転校するまでは、とある支部で働いていた。この支部長とは犬猿の仲。

とにかく面倒くさがり。のくせに暇なことも嫌いというダメな性格の持ち主。風紀委員の仕事でデスクワークをするのが面倒なので、支部内ではいつもゲームばかりしている。

狭い自宅の中はエロ本やR-18のDVDなど、未成年閲覧禁止のアイテムが溢れかえっている。これに関しては、自分でもかなり痛い状況だと自覚している。

髪は地毛ではなく自分で染めたもの。青年の心を忘れないように、中学一年生のときに突然染髪した。最近、違う色に染めることも考えている。

支部長
しぶちやう

・本名

石地夜巳
いっぢい ちよ

180cm 67kg 16歳

・容姿

黒髪で少し短め。顔は普通などどこにもいる優男。
芦原に比べれば細身な体躯。ケンカはあまりしない。

・能力

サイコメトリ
読心能力のレベル4。遺留品の調査の際に使用する。本来、対象に触れなければ発動しないが、芦原に対しては触れなくても考えが

読める。

・武器

基本的にはデスクワークや証拠捜査が仕事なので、戦闘はあまりしない。万が一に備えて、腰に警棒が仕込まれている。

・嫌いなもの

芦原晋也

・好きなもの

ジャージメント
風紀委員の仲間（芦原を除く）

・座右の銘

『やるべきことは完璧に』

・その他

とある風紀委員支部の長。同じ支部の仲間にはかなり慕われている。本人もまた、同じ支部の仲間として彼らを信頼している。

かなり几帳面で、何事に対しても完璧にこなさなければ気が済まない性格。芦原の引っ越しの際も、家具の位置から散らかっていた本の角度まで全て完璧に監修した。

優男な見た目とは裏腹に言葉使いが荒い。支部の女子からは、そのギャップがまたイイ！と何故か好印象。

かなり分かりにくい主人公紹介……って何故このタイミングで出した？（後書き

誤字脱字、矛盾点などありましたら、是非ともお願いします。

第四話 レベルが上がって強盗に巻き込まれて彼女らに出会ってうんぬん（前書

そろそろストックが底についてきた感じです。はい。

第四話 レベルが上がって強盗に巻き込まれて彼女らに出会ってうんぬん

はあゝい。みなすわあゝん、こゝんぶあゝんわゝ。ピツカピカの中学二年生、芦原晋也でえゝす。今日も一日張り切って行っちゃいましょゝう！

……はい、すみませんでした。自分チヨーシこいてました。もうこのキャラは未来永劫出しません（たぶん

とりあえず決定事項として、毎回出だしの部分だけはキャラを変えていこうと思う。興味がない方は読み飛ばして頂いて構わない。感想欄に『ヤメロ』『面白くない』『駄文すぎww』とか書いていただいても全く気にしない。俺に危害はないのだから。

あと、これらは全部ただの妄想であることも忘れてもらっては困る。これに関しても感想で『メタ発言乙』とか言ってくれて構わない。困るのは作者だ。

だが、俺も一転生者として、この世界は二次小説で書かれているのかだけは知っておきたいものだ。そろそろ自分でも脳内ナレーションが恥ずかしくなってきた。

さて、御託はこの辺りにして、そろそろ本編に入ろうじゃないか。

俺、レベル5になりました。

はい。急な話ですいません。とりあえず、俺、レベル5になりました(二回目)

よくある話だろう？ 低い成績のまま長い間テスト受けてなくて、久しぶりに受けてみたらかなり成績が上がってたってヤツ。そんな感じだ。

ちなみに、学園都市には超能力者《レベル5》に達した能力者は、僅かに7人しか存在しなかった。俺はその8人目の超能力者《レベル5》になったというわけである。

そんな特待生の俺がたった今いる場所は――校長室だった。

「いやー、君が芦原君だね。どうぞ、座りなさい」

「ああ………すいません」

校長先生が着席を促す。

今になって思うのだが、何故校長室というのはこう、何か気まずい雰囲気になってしまっただろうか。

校長という位の高さ、内装の物静かさなど色々理由として考えられるが、やはり一番は、普段あまり入らないからであろう。だとすると、毎度校長室を出入りするような超問題児はこういう雰囲気は感じられないのだろうか。今の俺には羨ましい限りだ。

「まさかうちの学校からレベル5が出るとはね。校長の私も、鼻が高いつてものだ。はっはっは」

「はあ………こ、光栄です」

そんな俺の心情を知らずに、目の前のオッサンは気さくに話しかけてくる。やりにくいつたらありやしない。

しかも、俺は身体検査のときに校舎の壁を破壊している。その所システムスキャン為でさらに引け目を感じてしまう。

「ああ、校舎の事なら気にしないで。あの程度どつてことないさ」
「何故わかった!？」

しまった! 意外なところに読心能力者が!

俺の脳内ナレーションがバレてたらどうしょ……。軽く殴って記憶を消すか? いや、それはある意味校舎破壊より致命的だ……。

「さて……。そろそろ本題に入りたいのだが——何故頭をかかえて
いるんだね?」

「……………何でもないです」

見た感じあまり問題はなさそうなので、一度姿勢を正して真剣に
向かい合う。

そんな俺を見つめながら、校長が口を開いた。

「話というのはね……………君の能力名のことなんだ」

はあ……………?

「ノウリヨクメイ?」

「そう、能力名。レベル5なのだから、只の『念動能力』テレキネシスじゃあ不
恰好だろう?」

「……………駄目なんですか?」

「それが駄目なんだ。レベル5は同じ能力者と区別するために、そ
の生徒個人の能力名が必要なんだよ」

「……………面倒ですね」

「そうだね、めんどくさいね」

教師が言うなよ、それ。

いや、てかマジでメンドイっす。別に能力名とか気にしないし、俺。なんなら上の人が勝手に決めちゃってもかまわねーし。

「……というわけで、何か希望はあるかな？」

「あるわけないでしょう。バカじゃないですか？」

「うん、はっきり物事を言う生徒は嫌いじゃないよ。ということは、コチラで勝手に決めちゃっていいのかな？」

「全然大丈夫です。むしろ、そうして下さい。お願いします」

「お願いされたよ……。ま、まあいいや。用はそれだけだ。時間を取らせてすまなかったね」

「いえ、お気になさらず。では」

校長に一礼して、俺は足早に部屋を出た。

いらぬ用事だったな……。かなり時間食ったし、何しに来たんだよ。

現在時刻は……。二時ジャスト。昼飯はもう食ったが、少し小腹がへったな……。ちよつくら出掛けるか……。

俺の能力名、どんな感じになるだろ……。少し楽しみだな。

○○○○○○○○○○

「学園都市史上8人目のレベル5!!」

能力名『サイコキネシス万物操作』!! その正体は、風紀委員の中学生!？」

あれから僅か十五分で流れたニュースである。

（サイコキネシス万物操作、ねえ……）

悪くはない、な。これで俺は世間的にレベル5の能力者『サイコキネシス万物操作』になったわけだ。名前は誰も知らないが。

「って、それより何か食えるところないのかよ……」

さて、状況的に言えば、引越して間もない見知らぬ町で軽く飲食ができるスポットを探しているわけで。

昨日は迷子になっていた所為で疲れていたので散策もしていない。町を練り歩くにはこの地域を知らなすぎた、愚かな芦原晋也であった。

そんな俺の目に止まったのは、小さなクレープ店。

（しゃーなー……。とりあえず腹減ってるし、ここでいいや）

男がクレープというのも恥ずかしい気はしたが、俺は仕方なくずいぶん重くなった足で、クレープ店に近づいていった。

『そ、それはわたくしと間接的な接吻ベーゼをご所望ということですね
!!』

『は？』

『ではお姉様からお先にどうぞ。わたくしはその後でじっくり堪能させていただきますのっ』

『ゲッ！！　しまった、そーくるかつ』

——そして2秒で後悔した。

店の目の前で繰り広げられる、二人の少女の百合っ気溢れる（？）会話。

攻め側は、髪両側をリボンでくくったツインテールで、少し小柄な女の子。右腕には、盾をモチーフにした風紀委員の腕章が見える。

受け側は、短めの茶髪で髪止めをつけた、勝ち気溢れる女の子。スカートの下からは短パンがちらちらと窺える。

そして二人とも、名門常磐台中学の制服を来ていた。ときわだい

さて、これを無視しながら、戸惑いを隠せずに苦笑している店員さんからクレープを購入することが俺にできるだろうか。答えはもちろん否である。ハイ、今へたれだと思った奴は死刑な。

というわけで、その二人が離れるまで近くで待っていることにした。

『あ！　白井さん。御坂さんも』

『あら？　初春じゃありませんの』

『おつかれさまですー』

何故増えるし。

現れたのは、頭の上に花が咲いている、なんとも独特なスタイルを持つショートカットの女の子。制服からみて柵川中の生徒のようだ。そして右腕にはツインテールの子同様に風紀委員の腕章がつけられている。

余計に出ていきにくくなったではないか……。しかも同中だろう？　ほぼ確実に絡まれるじゃないか！

「まったく……。めんどくせーん？」

ため息をつきつつ顔を向けた先には、へんてつのない只の銀行。ただ……

「昼間っから防犯シャッター……はあ」

嫌な予感が……

ドガアアンッー！！

（やっぱな——っ！）

盛大に爆発した銀行入口。もうこれだけでも器物損壊の現行犯は捕れるな。

「めんどいけど、行くかな」

まったく……何でこんな真つ昼間に働かなきゃいけないんだろ。

『ジャッジメント「風紀委員」ですの！！ 器物損壊および強盗の現行犯で拘束しますー！！』

……と思つたら、すでに先程のツインテールの子が行動を取っていた。

ここはありがたく傍観を決めさせて頂こうかな。……何だよ、働かないのがそんなに悪いか。

『そこをどきなお嬢ちゃん。どかないとケガしちゃうぜー！』

バランスボールみたいな体型の奴が、ツインテールの子に突っ込んでいく。

あ、死亡フラグ立った。

『……そついう三下の台詞は』

ガッ ブウンッ！

『ぐわっ！』

『——死亡フラグですわよ？』

足を払われあっさり鎮圧されるバランスボール。
にしても、体重差4倍はあるのにあそこまで綺麗に投げるとは。

これは俺の出る幕はねーな。よし、帰るか！

え？ そこは加勢するのがテンプレじゃないのかって？ 甘いな
デメエら！ 世の中全てテンプレ通りにいくと思うな！

というわけで、俺は回れ右をして来た道に戻ることにした。

ギャルルルルッ！

『チッ……あんなの相手にできるかっ！』

あゝ……。今強盗の車が通り過ぎてったな。でも大丈夫だろう。

バチバチッ……ドゴン！！

あゝ……。強盗の車が吹っ飛んだな。それでそのまま俺の方に
……って

「ギャアアアアアアアアアア！？」

危なあああああつ！？

「っ……だア！！」

ピタッ……

「はぁ……はぁ……ギリギリセーフ」

寸での所で能力を発動し、ギリギリの位置で車の落下を止める。

（今ガチで死にそうだった！ 本気で走馬灯を目撃したよ芦原晋也！
つか誰だよこんな危険なことする奴わ！）

とりあえず車を下ろし、文句を言うべく後ろを睨む。

すると、すぐ近くに何やら値踏みするような目で俺を見つめる短髪の子が。……え、何？

「アンタ誰？ 今のどうやったの？」

「……は？」

いやいや、お前が誰だよ！ そして何故に上から目線！？ 初対面の男に上から物言うとか、反抗期真っ盛りか！ あと、絶対こいつだよなあ！ 車吹き飛ばした奴！

「ちょっと聞いてんの？」

「『聞いてんの？』じゃねえ！ お前の所為でこちとら命の危機に陥りそうになつてたんだよ！ お前ペースで勝手に進めてんじゃねえ！」

「うつ……ご、ごめんなさい」

一気に縮こまる短髪の子。

「よし。まずは人の名前を訪ねる前に自分の名を名乗れや、小娘」

「え、えっと……御坂美琴みさか みことです。常磐台中学二年で……」

「なんだよ、タメだったんかよ。オツケー、メサカな」

「いや、メサカじゃなくて御坂だし……って同学年なの!？」

信じられないといった表情のメサ……御坂。確かに、髪の毛金色に染めた同学年（しかも中学二年）なんて引くよな。実際、俺今30歳越えてるんだけど、精神年齢的に言えば。

「お姉様。どうかされましたか？」

「あ、黒子」

御坂の後ろからツインテールの子がヒョコヒョコと髪を揺らしながら混ざってきた。

「丁度いい。コイツ殺人未遂の現行犯だから逮捕しちゃってくれ」

「な、何言ってるのよ! 私がいつそんなコト……」

「ほづ……そんなコト、だと？」

視線を移動。道に転がっている車を捕捉。運転手は現在気絶中……。

「否定……できませんわね……」

「え、ちょっ!？ 黒子!？ 私は個人的にケンカを売られたから

……」

「だったら他人に被害がでねえようにしろや。俺まで殺そうとするな」

「……ごめんなさい」

縮こまる御坂。あ、なんか楽しくなってきたかも。

「ま、まあまあ、お姉様。そうお気を落とさずに。それと——風紀

委員の白井黒子（しろい くろこ）と申しますの。お姉様の粗相に関して、わたくしからも深くお詫び申し上げますわ」

「あー……もう大丈夫だから。ご丁寧にどうも」

流石に無関係の子に頭を下げられるのは気が引ける。ツインテールの子——白井は俺の言葉にホッと安堵の息を洩らした。

「で、アンター一体何者なのよ？」

「切り替えが早えよ、お前は。知り合いが謝ってることに責任は感じねえのかよ」

「こっちはもう名乗ったんだから、そっちも名乗り返すのがマナーつてもんでしょ？」

「いや、だからさ……」

かなりめんどいことになってきた。仮にでもレベル5になったのだから、バレたら騒がれることは間違いない。なんとかして状況の打破を……

「すまんが少し用事思い出したから、もう行ってもいいか？」

「自分だけ名乗らずに逃げるのは許さないわよ」

「お前が勝手に聞いてきただけで、答える義務はないはず……」

「わたくしもお姉様が興味をお持ちになられた殿方のお名前、是非ともお聞かせ願いたいものですわ」

「え、なんでお前まで………はあ」

これ以上の抵抗は無駄だと判断し、仕方なく名乗ることにする。めんどくせえなあ……。バレなきゃいいか。

「……芦原晋也。柵川中学二年だ」

「ふーん……。で、能力は？」

「……ただの念動能力だよ」
テレキネシス

「レベルは？」

「何でそんなことまで教えなくちゃいけないんだよ」

「咄嗟に発動して車を持ち上げるなんて、結構レベル高いんじゃないの？」

「教えねえ。大体何で——」

そこまで言ったときだった。

「あ——っ——!!」

会話に突然横切ってきた少女の声。振り返ると、先程の頭が花畑になっている柵川中の制服を着た——

……柵川中学？

「どうしたんですの、初春？」

「こっ、こここここの人知ってますよ！」

俺は自分の少ない努力が無に帰したことに、軽く頭痛を覚えた。

「き、今日レベル5になった柵川中学二年、
サイコキネシス万物操作の芦原晋也さんですよー！」

「……はあ」

……ため息一つ洩れる。

「え」

「ええええええええええええ！！？？」

そしてピツタリとハモる、少女たちの驚愕の声。

俺はまだ知るよしもなかった。

この出会いによって、これから更に面倒な事件に、俺が巻き込まれることになるうとは。

第四話 レベルが上がって強盗に巻き込まれて彼女らに出会ってうんぬん（後書

誤字脱字、矛盾点、感想などありましたら、是非ともお願いします。

第五話 落とし物を訪ねて三千里…… マイナス2999里（前書き）

ストックのラストです。こっから不定期更新になるかもよ、B - D
ASH。

第五話 落とし物を訪ねて三千里……マイナス2999里

——気がつくと、辺り一帯全てが薄黄緑だった。

「……あれ？ 何コレ、デジャヴ？」

『はっはっは。ようやく気付いたようだな』

「っ！？ て、てめえは！ ……………誰だっけ？」

『……なるほど、もう忘れてしまったというのか。ならばしかたない、これを読め』

「うおっ！？ いきなり目の前にパソコンが！？ ……………って、にじファン？」

『その中にある「俺とはある転生者」という二次小説の第一話を読むんだ』

「えっと、これか？ 原作とはある魔術の禁書目録、とある科学の超電磁砲……。知らねえな」

『いいから読め。俺も暇じゃないんだ』

「へーへー……。……………あのさ」

『何だ』

「この主人公、どっかで見たことあるんだけど？ つか、もう俺じやね？」

『そうだ。転生者であるお前を主人公に書かれた二次小説だ。お前も生活していて違和感があったらどう？』

「たしかに……。止めようとは思っていても、つい脳内でナレーションを展開してしまうことはあったな……。つまりこの厨二病症状は、作者が無理矢理仕込ませたものだ」と

『その通りだ』

「……………ったく。にしても、これつまんねえな……………」

『そんなことはどうでもいいんだ。俺はお前に伝えたいことがある』

て来たんだ』

「伝えたいこと？ 何だそりゃ」

『大事なことだ。よく聞いておけ』

「……何かあったのか」

『ああ。実はな……』

「………」

『実は……』

「………（ゴクリ）」

『——俺、来月結婚するんだ』

○○○○○○○○○○

「そっちの方がどうでもいいだろうつがあああああああああ！
！……！」

俺は思いつきり立ち上がり、シャウトした。

はい。芦原です。毎度お世話になってます。

さっきね、神のおっさんに再会して、俺が二次小説の主人公だつて判明したわけね。

いやあ、そりやもう安心したよ。数日前から脳内ナレーションシンドロームが止まらないもんだから、この症状が他人にでもバレたらこの世界で生きていけないもんね。これで『おま、何に對してナレーションしてんだよ？』って訊かれても『画面の向こう側の読者に向かつてだ』って返せるもんね。嘘はついてないもんね。

でも、まあ……今は、さ

「そうか……！俺の授業はそんなにどうでもいいか……！」

この状況をどうにかするべきだよね。

簡単に説明するには、昨日の出来事から遡らなければいけない……

「あ、芦原さんが……」

「……レベル5!？」

信じられないものを見たような表情を作る御坂と白井。

俺はそれらを全てスルーし、頭頂部がお花畑になっている痛い少女へ目を向ける。

「ええーっと、君の名前は？」

「わ、私ですか!？ う、初春^{ういはるかぎり}飾利です！ 柵川中学一年で……」

「あー、オツケーオツケー。ウミハルさんね」

「あ、いえ。ウミハルじゃなくて初春……」

「じゃあウミハルさん……… ちょっと覚悟してね？」

へ？ と惚ける初春に向けて能力を発動。体を宙に浮かせて不規則に高速回転させる。

「キヤアアアアアアアアア!？ あ、芦原さん!？ 止めてく
ださいいいい！」

「まったく……人の個人情報に勝手に喋るなって、親か教師に教わ
らなかつたかい？ あ、大丈夫。スカートはちゃんと固定してある
から」

「そつゆう問題じゃないですうううううう!!」

涙目になりながら目を回す初春。少しだけドSに目覚めそうにな
ったところで、

「あの、そろそろやめてあげては……」

白井の制止の声がかかる。

「え、何でだよ？　こんなにも愉快なのに」

「……愉快なのは否定はしませんが」

「白井さんっ！　そこは否定してえ！」

「ですが、これ以上続けられると初春の精神に異常をきたす可能性が……」

「頭に花畑を展開してる時点でどうかとは思っが……、しかたない、そろそろ止めて——」

ドゴォン！

突然、地響きのような音が響いた。

発生元の方に首を回すと、バチバチと放電している御坂が、まるで獲物を見つけた獣のような雰囲気醸し出していた。

「アンタ……本当にレベル5なのね？」

「……だったらどうなんだ？」

「そんなの、決まってるじゃない……！」

——私と勝負しなさい！！」

はい、回想終了。

あのあと勿論俺は断った。コンマ数秒で断ってやったさ。

するとどうだよ、アイツ前触れなしに俺に電撃放ってきやがったんだぜ？ 殺人未遂でパクれるぞ、普通に。

まあ、いきなり攻撃されてそこまで冷静になれなかった俺は、もう一目散に逃げた。生存本能が俺に告げただ、『アイツは俺を殺す気だ』と。

そしたらそのまま追ってくるわけだよ、アイツが。『逃げんなコノヤロオオオ！』とか言ってたけど、俺を殺そうとしてるやつに對してすることなんか“逃げる”以外に思いつかないぞ？

そんな訳で、一晩中追いかけて回された俺の瞼は激烈に重たくなつてしまった。つまりそれは――

「俺の授業で居眠りとは……そんなに俺の補習が受けたいのか……！」

……まあ、そうゆうことだ。

覚悟しておけ！ と最後に言い放った教師はそのま^{ハゲ}ま授業を再会した。現在の授業は歴史。精神的にアラサーの俺が真面目に受けるような授業ではない。

とりあえず立ちっぱは色々と視線がキツいので席に座る。すると後ろの席の男子がツンツンと背中を小突いてきた。

「（お前、中々度胸あるよな）」

教師にギリギリ聞こえない声量で俺に囁きかける男子生徒。名前がわからないので、とりあえず太郎と呼称しよう。

俺もギリギリの声量で太郎に返した。

「（何がだよ）」

「（あの先生の補習はな、この学校の間では『奈落の部屋』と呼ばれて恐れられてんだぞ）」

「（へえ……。具体的には？）」

「（芦原は念動力系だったよな。だったら『コロンブスの卵』を無限にやらされる）」

ここで解説。『コロンブスの卵』とは。

簡単にいえば、生卵を能力を使って逆さに立てるというもの。力が弱くては卵は立たないし、強すぎても割れてしまう。微妙な力加減が難しい念動力系能力者泣かせのメニューだ。

「（そうか。忠告ありがとう、太郎）」

「（誰だよ、太郎って！？ 俺は達郎だ！）」

変わんねえじゃねーか、別に。

「んじゃ、お疲れーっす」

「ああ！ 気いつけて帰りやがれコノヤロー！」

教師の叫びを背中受^{ハゲ}けながら、俺は補習室——通称『奈落の部屋』を後にした。

元々、『コロンブスの卵』は俺の得意分野と言っても過言ではない。何せ、日常的に能力を使っている所為で、力加減など勝手に体に染み込んでしまっているからだ。

勿論そんなことなど露^{ハゲ}ほども知らない愚かな教師は、卵のパックを片手に

『今日は家には帰さねえぜ……！ 俺の授業をサボったことをみっちり反省させてやる！』

とか言い出したりして。別に授業をサボったわけではないのだが。そして、そんな教師に若干イラついた俺は、彼が目を離している隙にパックの中の卵を全て使って、卵の逆立ちタワーを形成させた。ニヤニヤしながらこつちに目を向けたハゲは、『ふふん。たとえば貴様がレベル5でも、俺の課題はそうそうこなせるものではなああああああああ……！？？』なんて面白い台詞を吐いて腰を抜かした。先程までの余裕は、完全に驚愕という色に塗り潰されていた。

結果、俺は『奈落の部屋』から30分で生還を果たしたのであった。

「はあ……どうでもいい時間を食ってしまった」

ため息をつきながら校門を通って学校の外へと出る。

そして、今日は風紀委員^{ジャッジメント}の支部に出向く日だったと思い出して、深く肩を落とすのだった。

「……めんどくせえなあ」

「……どうしてこうなった？」

俺は一人、ポツリと呟いた。

俺が今、何をしているのかと問われれば、まあ簡単に言えば落とし物探しだ。風紀委員はいわば学園都市の警察のようなもので、落とし物探しとはいえ立派な仕事の一つだ。

そこまでの経緯としては、支部についてからその支部長に挨拶で、女性の先輩（おそらく年上だろう）と共にパトロール兼物探し、てな感じだ。

そこまではいいんだ。問題としては……

「ごめんねー。私じゃここ通れなくってさ」

『いや、私もどっちかというところギリギリアウトっぽいというか——』

ナゼ御坂ガココニイル？

これに關しての経緯はこうだ。

『少し休憩してたうちになんかいた』

たぶん、先輩が間違えて連れてきたんだろうが、御坂って風紀委員だっけ？ あのとときは腕章持ってなかったよな……。

で、その御坂は何故か建物の間に挟まっているわけで……

『ちょ……！ 虫……！ 何か脚の多いのが近づ……』

「御坂がんばれー（棒）」

『ちよつとアンタア！ のんきに見てないで助けるや！』

「つかさ。こんな所に物落とすやつがいるか？ つか、こんな狭いところ、わざわざ通らねえって」

「うーん。そう考えたらそうね……」

『それ入る前に言っ……って、さっきの奴が！ ギャ——！！
くんな——！！』

さて、次いこうか。

（30分後）

「だあ——っ、あつっ——！ 少し休憩とりましょうー！」

とうとう御坂が音を上げた。

「なんだよ、根性ねーな。もっとキビキビ働けえ」

「アンタはなんもやってないでしようが！……つかさ、もう少し情報収集とかした方がよくない？」

「たしかに、さっきから変な所しか探してないっすよ？」

「うーん……。よし！次はあそこを探してみましよう」

「あ、スルーっすか……」

俺達の意見など完全無視で、ずんずんと歩いていく先輩。そんな彼女の姿に、俺はため息をつくことしかできない。

「……で。今度は児童公園か」

先輩が進んでいく先には、小学1〜2年生ぐらいの子供たちが賑やかに遊んでいた。

とりあえず邪魔にならないように、端の方を探してみる。

ポーン、ボカッ

「って！」

頭に軽い衝撃が走る。

『う、ごめんなさい』

女の子の声でしたので辺りを見てみると、すぐそばに青色のボールが転がっていた。

「つたく、気をつけろよ」

そう注意して、その女の子に軽くボールを投げてあげる。

シャ——、ドンッ

『ゴフッ』

ふと見ると、滑り台から滑ってきた男の子が、四つん這いになっていた御坂に突っ込んでいくところだった。

「ブフっ！」

そして、こみ上げる笑い。

「コラァ——！ 邪魔すんな——！ あとそこ笑ってんじゃね——！」

「いや、だって面白かったし……プッ！」

「思い出し笑いすんな！」

ギャーギャーと言い合っていると、まわりに興味を持った子供が集まってきた。

『おにいちゃんたち、ジャッジメントのヒト?』

『おねえちゃん、トキワダイチユウガクのセイフクだー』

『おじよーさまだ』

『おじよーさまとヤンキーのふうきいいんだ』

子供たちが相手だからか、御坂もやりにくそうな表情をしている。それより、今ヤンキーって言った子、ちょっと前に来なさい。傷つかない程度にお仕置きしてあげるから。

『なーなー』

『あんだい?』

小学生ぐらいの男の子が訊いてきた。

『にーちゃん達は付き合ってたのか?』

はい、来ましたよ、この質問。子供というのは純粹だから、こういう質問でも容赦なく訊いてくるからな……。

後ろで赤くなってる御坂を一瞥して、その子の質問に答えてやる。

「お前、このねーちゃんがどんな奴か知らないんだな。このねーちゃんはな、罪のない人を追いかけて回して攻撃してくるような、通り魔みてえな人なんだ。だから、こんな奴と付き合うなんて——（バチバチバチ）——ぎゃあああああ!？」

「余計なこと吹き込んでんじゃないわよ!」

体に迸る電流（リアルに）。俺は耐えきれずに地面に倒れこんでしまう。

しかし、もう言ってしまったものは止められないので……

『とおりまだ』

『とおりまふうきいいんだ』

「違うわよっ！　てか、通り魔風紀委員ってなによ!？」

子供たちはワーキヤー言いながら御坂から離れていく。それを御坂が追いかけて、御坂対小学生の鬼ごっここの開始。

「お前……ら……、何……遊んで……——」

『その犬っ、捕まえて——!!』

先輩の声が公園に響いた。

首を回して声のした方を向くと、目標をくわえた犬がスタコラサッサと逃げていくところだった。

「は……はいっ!？　ちよっ、芦原あ！　早く立ちなさいよ!」

「いや無理……！　体痺れて動けねえ……!」

「ああもっ、役立たずが!」

てめえが電気ビリビリしてたんだろうが!

御坂が犬を追いかける。だが、本気で走る犬に追いつくはずがなく……

バリバリバリ！ パリーン

御坂は強硬手段を取るしかなかった。

放たれた電撃はライトのついた柱に当たって、ガラス部分を激しく破裂させた。

むやみに物を壊すな。器物破損でパクるぞ、マジで。

「殺った——っ！！」

その電撃に怯んだ犬に飛びつく御坂。彼女の手足は対象をがっちりとホールドしていた。

「よっしゃあ！！ 捕まえ——ありゃ？」

だがしかし、その犬の口には目標の姿はない。御坂はキョロキョロと辺りを見渡す。

「上！ 上——！」

先輩の声で、バツと上を見上げる御坂。目標を捕捉すると同時に、落下地点へ走り出した。

「だああああああ！」

目の前には水の張った噴水。目標物は確実にその中へと吸い込まれていく。

そんなことも構わず、御坂は大きく前に跳躍し、落下する目標物に手を伸ばす――

あ、そっぴや俺もう痺れとれてるわ。

能力を行使。7・43m先の対象を上方向に移動。
俺の能力で目標物は落下運動を停止し、上に浮き上がる。

「……………は？」

完全に無駄な努力をした御坂は、そんなすっとんきょうな声を最後に、浅い水の中へと沈んでいった。

その後、怒り狂った御坂に追いかけて回されたのは言うまでもない。

第五話 落とし物を訪ねて三千里…… マイナス2999里（後書き）

誤字脱字、矛盾点、感想などありましたら、是非ともお願いします。

第六話 二度あることは三度ありながらも二度目の正直（前書き）

タイトルをつけ忘れるところだった……………

ストックがなくなってスペックが低いかも知れませんが、あしからず。

第六話 二度あることは三度ありながらも三度目の正直

「ああ……疲れた」

一人呟きながら俺、芦原晋也は闇夜の学園都市を歩くのであった。

「あのやろつ……なりふり構わずビリビリしてきやがって……。一般庶民の方々が目に入っていないのか、あのお嬢様は」

『あのお嬢様』とは言うまでもない、かの電撃少女、御坂美琴だ。威力から見ればかなりの高位能力者と見受けられるが、それ故に無関係の人への危険度が高い。向こうもそれは考慮していると思うが、流石に黙って見ていられない。アンチスキル警備員の出勤も考えていいと思う。

俺は本日何度目かのため息をついて、手短なコンビニへと入っていった。

……ああ。忘れてた。

ども、芦原です。毎度どうも。

この冒頭の小噺システム、そろそろ止めてもいいんじゃないかな？ 誰も見てないって、絶対。キャラのストックも切れてきたしさ、話のストックと共に。それにいつか『行数稼ぎ乙ww』とか言われるのも目に見えてるしな。

よし、じゃあ画面の向こう側にいらっしゃる読者様に伺います。
このシステム、止めた方がいいですか？ 止めた方がいいと思う
人は拳手をお願いします。

……うん、わかんね。

でもまあ、続けてきたものを急に止めるのもアレだし、まだ六話
で止めるのもどうかと思う。だからまだ止めない！

……十話ぐらいには止めるかも。

てなわけで、コンビニに入ったのである。

雑誌コーナーで雑誌の内容と財布の中身を確認。

財布の方は……490円。安い弁当を選んで買ったら490円。

適当なおにぎりを四つ買ったら大体490円。なんとも素晴らしい
金額だろうか、490円。

雑誌の方は……ちつ、ハズレか。やっぱり売ってる所は少ないんだ
な、学生の街なだけに。

求めていたのは……勿論のことR-18のやつである。この街の
住民の七割は学生なので、置いてある店と置いていない店があるの
だ。ついでに新居の近くのコンビニには置いてあった。

さて、俺は自炊ができないので夕飯は市販のものを買わなければ
ならない。財布には490円あるので弁当は買えるが、飲み物がな
いのはキツイ。

しかたないな、と呟いて、ATMを利用しようと機械のある方へ
と向かう。

《暗証番号が違イマス》

『は？ いや、そんなはずは——』

《暗証番号が違イマス》

『何でだ——っ！』

なにやら騒がしいので見てみると、機械の前でツンツンヘアーの高校生が悪戦苦闘していた。

「あー……どうかしましたか」

「え？ いや、何故だか暗証番号が——うわっ！」

「その反応、リアルで傷つくわ。そんなに悪い人に見えますかいな、俺は？」

「え、あ、ジャッジメント風紀委員？ 良かったあ」

「で、どうしたんすか？」

「いや、だからさ。暗証番号が認識できないつつつか……」

「だったら一回取り出して再チャレンジしたらどうです？ つか、俺も使いたい感じ」

「そ、そうだな。この取り消しボタンを……」

ふう、なんとか使えそうだ。

「……あれ？ マジで！？ おい——！」

「……？」

「ギャ——！ カードが飲み込まれて出てこなくなった——」

「マジか……」

その時、自動ドアにここ数日で見慣れた姿が映し出された。

「不幸だア——ッ！」

叫び声が店内に響くと同時に、扉の向こうからビリビリ少女、御坂美琴が現れた。

（不幸だア——ッ！）

すみません、見知らぬ先輩！でも何故このタイミングで再エンカウト！？現実的にあり得ねえだろ！漫画の世界じゃねえんだから！

俺はその姿を確認するや否や、お菓子コーナーの陰に隠れて逃亡準備を謀っていた。まさかこのタイミングで中学のときに英語でならったassonass（ゝするや否や）を使うとは……。習ったときは使い道ねえだろ！って即つつこんだぞ。

そして、御坂は目の色を変えて言い放った。

「久しぶりね」

久し……ぶり？ いや、今日会ったばかりだろ。別に言いように
よってはおかしくは無いだろが、それだったら『また会ったわね』
ぐらいでいいんじゃない——

「ゲッ！ ビリビリ中学生」

そう答えたのは、先程まで頭を抱えていた見知らぬ先輩だった。

「あれ以来毎回毎回テクトーにあしらわれてきたけど……。今日と
いう今日は！ 決着をつけてやるんだからっ！」

ああ、なるほど。あの人も被害者ってことか……。御坂と関わっ
てしまったばかりに、非常に不幸な先輩だ。

先輩には申し訳ないが、ここは身代わりになってもらってやり過
ごすのがベストだろ——

「それと、芦原あ——！」

ビクウッ！

「隠れたって無駄よ。さっさと出てきなさい」

「……何故わかったし」

「そのくらい電磁波の反射で察知できるわよ」

「魚群探知機か、テメーは」

素晴らしい計画の早すぎる破綻を嘆きつつ、お菓子コーナーから姿を現す。

「えっ？　ちよつ、意味が分からないんですが？」

先輩は訳がわからず狼狽えている。

「アンタもまとめて相手してあげるから、私と勝負しなさい」

「断る。戦う理由がねーし、周りの方々のことを頭に入れる。もし、誰か怪我でもさせたら傷害罪で連行するから」

「そんなもん、人のいないところでやれば……」

「ああ、そういえばお前が壊したライト、始末書は俺が書くんだっけな」

「うつ……。ア、アンタだって私を噴水に落としたじゃない！　アレでおあいこよー！」

「あれはお前が勝手に突っ込んでっただけじゃねーか」

「う、うるさいうるさい！　とにかく、私と勝負しろ——！！」

「……はあ」

今日はため息が多い日だ。

項垂れていると、ようやく状況が理解できたらしい先輩が口を挟んできた。

「えっと……ようするに、君もこのビリピリの被害者なのか？」

「ビリビリ言うな！」

「お互い大変ですね。あ、俺は芦原晋也っていいいます」

「俺は上条当麻だ。被害者同士仲良くしようぜ」

男同士、固い握手を交わす。この先輩——上条さんとは仲良くできそうだな。

「よし、それじゃあどうです？ 被害者同士親睦を深めるためにも、今から二人で食事をしませんか？ 奢りますよ」

「おお、本当か！ いや、今月はいろいろピンチだから助かるぜ」

「あ、でもその前にお金をおろさないと。でもなあ……」

「このATM、俺のカードをまんまと飲み込みやがりましたから——」

「私を無視すんな——！！」

ドカンッ！

電撃を纏った御坂の怒りの拳が、目の前のATMに炸裂した。

ピピ——ッ カシヤッ

「「「あ」」」

それによつて、飲み込まれていた上条さんのカードがニュツと吐き出された。

「で……出たあゝゝゝ！！ サンキュー、ビリビリー！」
「ビリビリじゃなくて、御坂美琴っー！」

上条さんはカードが出てきたことに感激している様子。俺はそれよりもＡＴＭが心配なんだが……

「正直、何でこんなのに関わっちゃったんだろうって思ったけど、今初めてこの出会いに感謝……」

「アンタねえ——」

「おーい、お二人さん」

「「？」」

頭の上に疑問符を浮かべている二人に、煙を吹き出しているＡＴＭを指しながら告げた。

「逃げなくていいのか？」

ビー——ッ！

「ぎゃああああああああああああー！」

上条さん、御坂の手を引っ張りながら全力で逃走。というか、上条さんは何もしてないんだから逃げなくてもいいんだが。

……さて。

「俺も行くか……」

俺は二人を追いかけるために、渋谷店を出た。俺が風紀委員の腕章をつけてなかったら追う必要もなかったのに……。

○○○○○○○○○○

ところ変わってとある土手。

「う——、故障とかしてないといいなあ……。防犯カメラに顔映ってるだろうし……。って俺は何もしてないのに何で逃げてんだ？」
「上条さん、大丈夫です。防犯カメラに映ってるのなら必ず無実は証明されます」

実際、彼はただの被害者なのだから。

そして、当の実行犯はこんな反応である。

「んな事はいいから、二人とも勝負しなさいよ、勝負」
「誰の所為だと思ってんだよ！」

こいつには一回“罪”についての常識を叩き込むべきだと思う。

「勝負勝負って……今までオマエの全戦全敗じゃんか」

「え？ 前にもやったことあるんだ」

「う、うるさい！ 私だって一発も食らってないんだから負けてないわよ！」

「そう言う奴は大抵負けてんだよ」

「負けてないっ！ だから、勝負！」

ダメだこいつは……早くなんとかしないと……

勝負勝負とわめく御坂を冷たい目で見ながら、少し訊いてみる。

「じゃあ、どうしたら終わるんだ？」

「え？ そ……そりゃもちろん——」

もちろん……

「……………私が勝つたらよ」

「「はああああああああ……………」」

「そこっ！ 二人で大きいため息しない！」

これは本気で泣きかけた。

この電気少女の前では、負けとは死、または意識不明の重体とほぼ同意である。つまり、俺達は死ぬまで追いかけて回されるわけ……

……………ナニコレ、何の拷問？

これはいかん。どげんかせんといかん。なんとか説得を試みよう。

「待て、御坂。それでは俺達の身が持たない。お前も相手が本気じやねえと納得できないだろう？」

「うっ……たしかに」

「それに、二人がかりで倒されても釈然としないだろう？」

「ちよっ、何で私が負けるって決めつけて……」

「釈然としないだろう？」

「……まあ、そうね」

よし、話はいい方向に転がっている。上条さんは俺に羨望の眼差しを向けている。これはいけるぞ！

「そうだろう？ だから今日のところは上条さんだけで勘弁しとけ」

「オイコラちよつと待てや」

「御坂はちゃんと正々堂々勝負できる。俺は帰ってテレビが見れる。まさに一石二鳥、一挙兩得の提案だ」

「あれえ！？ 俺のことはアウトオブ眼中ですか！？ 俺は利益無しなんです！」

「何言ってるんですか。上条さんにもちゃんと利益があります」

「……例えば？」

「就寝前の運動でお腹周りの脂肪を燃焼！」

「いらねえよ！！」

上条さんは俺の『先輩を身代わりデコイにこの場を切り抜ける作戦』にご不満の様子だ。

そして、御坂は俺の提案にこう申し出た。

「よっしゃ！ 勝負よ、勝負！」

一人自分勝手な御坂を見て、俺は心の中で涙した。

「何でこんなことに……めんどくせえ」

俺と御坂は橋のすぐそばの河川敷で対峙している。足元は莽莽と雑草が生えており、正直うざったい。帰りたい。

「つか、さ……」

「何で御坂は俺のこと敵視してるわけ？」

「は？」

「だって、俺は別になんもしてねえだろ？ なのに初対面るときから追いかけてきて……何故だ？」

「そりゃあ……アンタが強いから？」

「理由になってねえだろ。もつと理由らしい理由ないのかよ」

俺だって理由も無しにこんな目に会うのは嫌だ。多少理不尽でも理由が欲しい。

俺の問いに御坂は首を傾げ、一つの答えを返した。

「私と同じ、レベル5だから」

……え、今なんて？

私と、同じ？

てことは……御坂もレベル5？

「……………へえ」

「？」

俺は能力を行使して、俺の周りの雑草を全て引っこ抜き、空中に浮かせた。

「御坂、さっき言ったこと訂正する」

「……………え？」

雑草は俺の目の前に巻き上がるように集まり、徐々に形を形成していく。

「少し、興味出てきたわ」

そして、雑草は人の形になって御坂に飛びかかっていった。

第六話 二度あることは三度ありながらも二度目の正直（後書き）

誤字脱字、矛盾点、感想などありましたら、是非ともお願いします。

第七話 何があっても自分の流儀は守りきりましょう(前書き)

ごめんなさいiiiiiiiiっ!!

更新すっつげえ遅れました!

そのせいかかなりクオリティ低いです!

でも……不定期更新なんだなあ……

第七話 何があっても自分の流儀は守りきりましょう

テレキネシス
念動能力。

離れた位置にある物体に干渉し、その物体、または物体の一部分を移動、加圧する能力。学園都市の中でも五本の指に入るほどポピュラーな能力だ。能力者は『何か見えない手を伸ばす感覚』などと話すが、まさにその通りだ。

能力の条件として、自分が直接接触しているものには能力は行使できない。能力を使うには、必ず体から離れていなければならないのだ。

また、肌に抵抗が感じられないものに対しては干渉できない。つまり、光や電気、炎、空気といったものには能力は使えないのだ。つまり、戦闘面に関しては、念動能力と同じくポピュラーな能力、エレクトロマスター バイロキネシス電撃使いや発火能力は天敵とも言える。

上に挙げたものなどを除けば、能力発動の範囲内である。レベルが高くなると、抵抗の弱い水なども操ることができる。

干渉できる総重量は上限があるが、その範囲内なら複数の物体に能力を行使することも可能である。無論、その分集中力と高い演算能力が求められる。レベル3以上の者でないと難しいだろう。

しかし、この場にいるのは念動能力者の頂点、レベル5『サイコキネ
作』こと芦原晋也だ。

彼にとってはそのようなこと、手足を操るようなものであった。

「——ッ!」

ドオン!

御坂は後ろ跳びで地面に叩きつけられた拳をかわす。

もといた地面は、“彼”の一撃によって大きく抉られていた。

「……それ、何よ」

御坂は“彼”と対峙しつつ、本来倒すべき相手——芦原に問いかける。

「何って……そりゃあ、タケマルだ。俺の友達」

「真面目に答えなさい。アンタ、念動能力者じゃなかったの?」
テレキネシスト

「ただの念動能力者だ。そう考えたら普通にわかるだろ」

そう答えて、芦原は再び“彼”を操作する。

“彼”とはいっても、地面に生えていた雑草から作った傀儡。芦原は精密な能力操作で草を纏め、人間の形に見せているだけだった。

「ただの雑草に、こんなパワーあるわけないでしょうが!」

御坂は額から電撃を放ち、傀儡の右腕を焼き焦がした。灰と化した草は、はらはらと地面に堕ちていった。

「おい、いいのか？」

「は？ 何が」

「大事な目印なくしちゃって」

「？ つつ！？」

御坂が横つ飛びで攻撃をかわす。そして傀儡が再び地面を抉る。

吹き飛ばしたはずの右腕で。

「おいおい。草を取り払ったぐらいで満足するなよ。タケマルは透明人間だからな。今のところ、まだ五体満足だぜ」

芦原はからかうように告げる。

もちろん、実際に透明人間がいるわけではない。

芦原はしたことは、傀儡の攻撃に合わせて地面の一部に圧力をかけて破壊し、あたかも傀儡が地面を殴って抉ったかのように見せつけているだけだった。

しかし、御坂も伊達にレベル5を名乗っているわけではない。

（操ってるのは芦原アイツなんだから、それを止めればこれも止まる！）

一瞬で打開策を組み上げ、実行に移す。

御坂は大量の電撃を芦原に向けて放った。

「うおっ!？」

芦原が声が漏らすと同時に電撃が着弾し、爆発音と共に砂煙を巻き上げる。

御坂が相手していた傀儡が、風に舞ってその形を消した。

(あれ? やっちゃった?)

傀儡が消えたことで、芦原の安否を心配しだした御坂。だが、それは杞憂というものだ。

「……今のは……本気で死にかけた」

芦原の声が御坂の耳に届いた。しかし、それは砂煙の方からではなく、真上からのものだ。

御坂は上を見上げる。

「……魔法使い?」

「なんか、ハリー・ポーターみたいでいいだろ?」

芦原は上空で棒状のなにかに跨がり、その姿はさながら箒に乗った魔法使いのようだ。

彼が跨がっているのは、その辺りに落ちていた鉄パイプだ。肌が直接触れないように手には革の手袋がつけられている。

「いやー、流石レベル5。タケマルの弱点を一瞬で見抜くとは」
「アンタも大概よ。まさか念動能力者が分身を作って攻撃してくるなんてね」

「そんな大層なもんじゃねーよ。見かけ倒しのパチもんだよ」

「……………見かけ倒し、ねえ」

御坂は挟られている地面をチラッと見る。

「で、どうする？ またその見かけ倒しとやらで攻撃してくる？」

「いや、あれは少し集中力があるからな。もう使わねーよ、めんどいし」

「そう。じゃあこっちから行かせてもらってもいいかしら？」

「あー、そーだな。そーするか、めんどいし」

「……………（ピキッ）」

その適当な返事で、御坂の額に青筋が浮かび上がった。

「ナメてんじゃ、ないわよっ！」

御坂はその怒りの感情を電撃に寄せ、芦原に向けて撃つ。

芦原は鉄パイプに跨がったまま、それをヒラリヒラリとかわしていく。

（ああ、もう！ しつこいわね！ こうなったら……………）

御坂が能力を行使する。

「……………ん？ なんかくるな——つとお！？」

すると、芦原が乗っていた鉄パイプが急に地面に引き付けられる

ように落下した。

鉄は磁力によって引き付けられる。御坂は電気を流すことで地面に電磁石の要領で磁力を作り出したのだ。

慌てて鉄パイプから飛び降りる芦原。このまま乗っていたらそのまま地面に叩きつけられてしまう。その瞬間を御坂は見逃さなかった。

「空中じゃ自由は利かないでしょっ!」

「やべっ……」

再び御坂が電撃を放つ。槍状のそれは外れることなどあり得ないほど真っ直ぐに芦原へと向かっていき、

「……ところがぎっちゃん!」

パンッ

「何っ!?!」

その身体に届くことなく何かに阻まれ、霧散した。

「ふう……初めてだったけど、なんとかできた」

「……うっそ」

御坂が驚愕の色を顔に出す。

電撃を防いだのは——車一台をまるごと包み込むほどの、大量の水だった。

（この量をあの川から！？ さっきの一瞬のうちに！？）

芦原のいる地点から川まで7～8メートルはある。すぐそばから持ってきたならまだしも、電撃が発射され着弾するまでの刹那の間に、それも大量の水を引き寄せるのは常人にできる技ではない。たとえレベル5だとしても。

（まさか、読んでた……？）

鉄パイプから飛び降りた時点で能力を使い水を引つ張っていれば、その後の攻撃に対応出来る。むしろそうでなければ防御は不可能だ。

「……やるじゃないの」

「そりゃどーも」

柄になく素直に誉める御坂の言葉を素っ気なく返す芦原。回りは未だに多数の水塊が漂っている。

「さて、どうするよ。これではぼ電撃は食らわないと見てもいいんじゃないか？」

実は通常の水は電気抵抗が高い。電撃の威力が高くて、これだけ多量の水では弾かれてしまう。

しかし、御坂の表情は崩れない。

「そんなのはどうにでも——なるんじゃないっ！—」

御坂の手に黒い影が集まる。そしてそれらは波になって芦原に襲いかかる。

「砂鉄……か？」

芦原は考察を口にしたあと、能力を使って動きを止める。

御坂は地面にある無数の砂鉄を、電磁力によって操っていた。細かく振動しているそれは、まさに変幻自在のチェンソーである。

しかし、相手は念動能力者。実体のある攻撃は通用しない。

「俺を相手に固体の攻撃は論外だろ。『万物操作』の名前は伊達じゃねーぜ？」

そう芦原が嘲るも、御坂の表情は崩れない。

御坂は一度能力を切り、砂鉄の支配を中断したあと、芦原に言い放った。

「その余裕、いつまで続くかしらね？」

「いつまで……って、そゆことが……」

芦原が呟くと同時に、黒い影が八方向から襲いかかった。

○○○○○○○○○○

「ハア……ハア……ハア……」

肩で息をする御坂。能力の使いすぎで限界が近づいている。

彼女は10分以上も攻撃をし続けていた。電撃が封じられ、砂鉄などの間接攻撃も無駄。ならば、防ぎきれないほどの攻撃を仕掛ける他にない。

それ故に能力を酷使し、なんとしても相手を沈めようと過度な攻撃を加えてしまった。

しかし、それでも彼は立ち続けていた。

「……お前……ガチで殺す気だったろ」

「ハアッ……ハアッ……ウ、ウソでしょ……？」

砂鉄の霧が晴れ、平然とした芦原が出てきたとき、御坂は心底絶望した。

回りを漂っていた水塊はなくなっていたものの、芦原は迫り来る無数の刃をいなし続けていたのだ。御坂としては絶望しないわけがない。

「さて、そろそろ決着をつけたいところなんだが……」
「ッ……！　まだよ……！」

プライドが負けを許さない御坂は、ポケットからゲーセンのコインを取りだし、芦原に向かってつき出す。

『レールガン
超電磁砲』

電磁誘導により、はじいたコインを音速の三倍に加速させて発射する、常磐台のエース『超電磁砲』こと、レベル5の電撃使い御坂エレクトロマスター美琴の真正正銘の切り札である。

「それが最後の必殺技か？」

芦原が訊ねる。

「そうね……。たしかに“最後の”必殺技ね」

「んじゃ、それを止めたら俺の勝ちってことだな」

「止めるもんならね」

「ま、そーだわな……」

芦原は頭をボリボリと掻き、自然体の状態を作った。

「……」

「……」

ドオウッ！

芦原の言葉を合図に、御坂の手から超高速のコインが発射された。

アルミ製のコインは空気との摩擦で燃えるように熱をおび、空中に橙色の軌跡を刻みながら直進する。

そのまま、絶大な破壊力を持った弾丸^{コイン}は芦原に迫り――

――そして、止まった。

「……え……」

御坂の声が漏れる。

芦原は手を大きく前に突きだし、能力を使いその手元でコインを止めた。

速度を失ったコインは重力に従って落下し、地面と共に虚しい音色を奏でる。

（そんな……。まさか……超電磁砲^{コレ}まで止められるなんて……）

力を失ったかのようにへたりこむ御坂。

敗北。

ただ、その認めがたき真実のみが彼女の脳内を走り抜けた。

「……これで終わりだな」

「……！（ビクッ）」

芦原の宣告に体を震わせる御坂。彼女に抵抗する体力は残されて

いない。

芦原は一步一步御坂との距離を縮めていく。

「……………（ビクビク）」

「……………はぁ」

目を瞑って震えている御坂の前に、芦原はため息をついて、

「……………引き分けだよ」

告げた。

「……………え？」

「簡単に言えば、俺は最後の攻撃を止めきれなかった」

芦原が片方の手の平を見せる。その手は赤く焼けただれ、痛々しく血を流していた。

「ったくよ……………無血試合で完封勝ち、つつーのが俺のシナリオだったのによ……………最後の最後で喰らっちゃった。そう考えたら俺の負けかもな」

「……………アンタ、最初っから力抑えてやってたでしょ」

「……………どーだかな」

実際、芦原が本気を出せば勝負は早くに終わっていたはずだ。能力で地面を抉れるのならば、それを御坂の身体に向ければいいだけ

なのだから。

だが、それをしたところで殺し合いをしたという事実しか残らない。何より『女の子に傷を負わせた』というのは、風評を気にする芦原にとって許しがたいこと。

だからこそ、芦原は自らの力を抑え、制圧ではなく鎮圧を選んだのだ。

「で、何で引き分け？ 私はアンタに何にも出来なかった。私の負けじゃない」

「俺自身、自分の流儀ルルを守れなかった。その時点で俺の勝ちはねえんだよ」

「そうゆうもんなの？」

「そうゆうもんなの」

「……私は認めないわよ」

芦原をじっと見つめる御坂。

芦原は再びため息をつき、御坂に言った。

「じゃあ勝ってみろ。誰の文句もないくらい、完璧にな」

「……っ」

「ま、機会があればいつでも付き合ってやるよ」

最後に言い残し、芦原は土手を上って帰ろうと歩き出す。

「ちょっと待ちなさい！」

その背中に御坂の声が投げられた。

「んだよ、まだなんかあんのか？」

ダルそうに振り返った芦原に、御坂は言う。

「で、電池切れで歩けないんで、なんとかしてくれませんか？」

「……………」

芦原晋也、本日最後のため息が夜の闇に溶けていった。

○○○○○○○○○○

お待たせいたしやした、芦原でさあ。

今回こそないんじゃないかと思ったそこのアンタ。甘いですね

い。最後に入るってパターンをお忘れだぜい。

……実を言うと、出来なかったただけなんだけど。

そりやそうだろ。さっきまで御坂と死闘を繰り広げてたんだぜ！
？ 無理だろ、あのシリアスパートでのいつもの入りわ！

だからナレーションなんて、どっかの誰かに丸投げしたよ！ 別にいいだろ、三人称ってことで！ 分かりやすいしさ！

さて、愚痴はこのへんにして、あのあとのことを話そうか。

あのあと御坂と一悶着あって、結局俺が御坂を担いで送ることになった。

最初は御坂も渋ってたが、俺だって疲れてんだよアンチキショウ、もう能力使えねえよ、という旨を激しく主張して納得を得た。

担いで送り届ける道中に、周りからの視線が気になったり、微かに背中に感じる柔らかい感触が気になったりとかしたが、そこところはどうでもいいので割愛。

で、常磐台の寮の前で白井に迎えに来てもらって、無事帰宅したというわけだ。

「つか……ガチで疲れた」

そう呟いて、ベッドに体を投げる。手のひらの痛みが未だに響くが、そんなものどうでもいいと言わんばかりに、睡魔が襲いかかってきた。

俺はそれに抵抗することなく目を閉じて――

あ、エロ本買うの忘れた。

「……………めんどい。だが行かないと」

再び体を起こし、家を出てコンビニへと向かう。

俺の精力が疲労を超越した瞬間だった。

第七話 何があっても自分の流儀は守りきりましょう(後書き)

誤字脱字、矛盾点、感想などありましたら、是非ともお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6270x/>

俺とはある転生者

2011年11月17日20時20分発行